
ARMORED CORE CRESCENT NIGHT

Mr.J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A R M O R E D C O R E C R E S C E N T N I G H T

【Nコード】

N 1 2 6 3 C

【作者名】

M r . J

【あらすじ】

戦争は市民をも巻き込んで激化していく。そんな中、両国から参戦を求められた中立組織があった。その組織の名は「レイヴン」＜苦戦を強いられたあのACから、オリジナルACまで！今、全てのアーマードコアを統括したオリジナルストーリーが始まる！！＞p.s. お気に入りACなどありましたら、感想に記述してください。武装も含めて、お願いします。

プロローグ（前書き）

お気に入りACなどあれば
感想の記述をお願いします

全16エピソード（プロローグ・エピソード省）の
いずれかで登場させたいと思います
武装もお願いします

プロローグ

それは三日月がきれいな夜だった

遠くの方には、鮮やかな光が点々としている
しかし

それはお祭りなどではない

兵士たちのキャンプの光だ

それは海に面した国「アーカイプ」の特殊部隊「ロベラーズ・ガー
ディアン」

そんな彼らの後ろには、いくつモノ倉庫が並んでいる
そこにあるのは戦車でも戦闘機でもない

そこにあるのは最強人型兵器「アーマード・コア」

彼らは独裁者「クリス・クライン」を討伐すべくあつまった同士

一方独裁者クリス・クラインも彼らに対抗すべくアーマード・コア
(AC) 専門部隊

その名を「エネミーバスター」を結成

しかし両国の戦闘は一般市民を大勢巻き込んでいった

お互いの兵士は次々に死んでいく

そんな中、中立に位置するAC専門組織にも

両国から莫大な資金と引き換えに参戦するよう
召集がかけられた

その組織の名は

「レイヴン」

くエヴァンジェく#1供給施設破壊

「やれやれ・・・やっと終わった・・・」

ヴァンは愛機AC「アエネアス」の修理を終えて肩からおりたACの修理は厄介で

外装の修理・塗装・チューニング

さらに各武器の調整・動作確認・弾薬補充
そしてプログラムの点検と配線チェックだ

後はお好みでエンブレムと呼ばれる自分オリジナルのマークを描く
なかでも厄介なのはプログラムだ
それぞれの点検がうまくいっても
プログラムにミスがあればおかしいことになる

「おいおい！俺が来る前に仕上げるなよ！！」

そう叫んだのはヴァンの専属コーディネーターのスサノンだ

「今回はさほど痛んでなかったからな・・・思いのほか早く済んだんだ」

「それで俺の給料が減ったんじゃあたまったもんじゃね」

笑いながらスサノンは再チェックを始めた

「レイヴン！仕事の依頼がきているわ！って・・・スサノン！！まだ修理がすんでないの！！」

彼女はシフ ナレーターだ

眼鏡をつけたその容姿は熱血教育ママといった感じだ

「早く終わらせてよ！？・・・レイブン次の依頼はアーデンリバー電力供給所の破壊です」

「また過激な依頼だなあ・・・」

ヴァンは笑いながら依頼書に目を通した

アーデンリバーとは、アーカイプ湾岸に通じる数ある大河のうちの一つで

今回の電力供給所は水力発電所のことだ

この発電所を破壊できれば

アーカイプは本土の10分の3の電気供給ができなくなり
クリス・クラインにとってこれほど都合のいいことはない

「なるほど・・・しかしこの依頼・・・さっさとこなさないとつらいな・・・」

「ええ・・・ですから！スサノン！！！！さっさと修理をおわらせなさい！！！」

「へいへい」

アーデンリバー電力供給所はアーデンリバーの下流にあるため
敵ACとの遭遇率が高いのだ

もちろん敵ACと戦闘になったとして

こちらが負けるとは思わない

しかし、わざわざ敵ACと戦う気など　さらさらない

「できたぞご婦人！！いつでもオーケーですわ」

「私はまだ未婚です！！！！」

やけに流れがはやい

今回のミッションはアーデンリバーの上流から下流を目指す
輸送ヘリから投下して、着地するのだが

今日はどうも流れが速い

「先日、上流は雨が降ったそうです・・・お気をつけて」

「ああ・・・じゃあ行ってくる！」

ハンガーユニットがはずされる

一瞬機体の脚がもってかれそうになったが
なんとか持ちこたえた

「このまま南下して目標を破壊する！」

アーデンリバーは特殊な形の流木が多い

そのため機体の隙間に挟まると取り返しのつかないことになる
慎重に機体を浮かせながら進んでいく

「目標発見・・・これより戦闘モードに移行する」

目標敷地内に上がると

一旦全てのエネルギーを止める

そして

キュイイイイー！ー！ボウツウウオオー！ー！！！

オーバードブーストとよばれるこの機能は

ブースターを一時的に極限まで爆発にちかいエネルギーで使用する
エネルギー消費は激しいが、その分機動力が上がり

奇襲にはもってこいなのだ

施設の一部を破壊すると、すぐに警報が鳴り響く

おそらくAC対策はしていたのだろう

警備ロボット（MT）が立ちはだかる

MTは有人型や無人型があるが、これはおそらく無人型だろう

あらゆる方向からエネルギー弾が飛んでくる

しかし、この「アエネアス」には通用する威力ではない

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

装弾数800発のマシガン数発でMTは破壊されていく

その時

強力なエネルギー弾を受けた

気づけばすでに供給システムのコアルームにいた

「それを破壊すればミッション成功よ！」

コアシステムは防衛力こそ高いが

それ自体は非常にモロイ

今回は威力の低いブレードだったが

コレを破壊するには十分だ

「供給システムの低下を確認！レイヴン・・・おつかれさま・・・
さ、帰ってゆっくりコーヒーでものみましょうか？」

帰り道は安易なものだ

全てのMTが供給力を失い動くことすらなかった

供給所を出たとたんに

緊急コールがあった

「レイヴン！気をつけて！敵ACの増援を確認！！これは・・・ランカーAC！！？」

ランカーAC

無名のACと違いアリーナに登録されたACを特別にランカーACと呼ぶ

「そこまでだぜ、レイヴン！！」

「この機体は・・・ジャック・フライト！！」

ジャック・フライト

アリーナの上位ランク保持者にしてアーカイブの副隊長だ

「今の装備では彼に勝つのは不可能！！！逃げて！！」

それが得策だった

しかし

こいつがそう簡単に逃がしてくれるわけがない

「ここが貴様の墓場だ！！」

絶体絶命のピンチとは、まさしく今の状態だ！！

弾は100発に満たない

コアガードシステムによって受けたダメージのせいで耐久力は2300といったところだ

しかも肩武器はコア損傷により機能しない

思いのほかダメージを受けていたようだ

超火力のグレネード弾が飛んでくる

腕に掠めてしまった

この手の武器は弾が少ない

しかし、その分一撃はかなりこたえる

「くっ！」

「どうした！！？ テメーはその程度か！！？？？」

口ぶりからしてかなり荒っぽい性格のようだ

しかし、一発一発は正確だ！！

ブースターをフルに使用してコンテナ裏に下がる

しかしジャック・フライトの機体は軽々とコンテナを飛び越えてやってくる

そもそも今回は要塞攻略仕様の重量機だ

軽量型のジャック・フライトの機体にスピードで勝てるわけがない

「ここまでか！！？？ レイヴン！！！」

全て着弾とまではいつていない

しかしもう耐久力は780だ

コレだけ損傷すれば

あの高熱の弾が掠めるだけで配線ケーブルは焼き千切れる

しかし、俺が爆散することはなかった

蒼い機体が俺の前に現れた

「逃げろ・・・ここは俺が引き受ける」

「なんだテメーは!!??」

ジャック・フライトの赤い機体は
謎の蒼い気体に立ち向かった

「何をしている、レイヴン・・・逃げろと云ったはずだ・・・行け！」

「ここは彼にまかせて引きましょう!!」

「わかった・・・あの機体がわかるか？」

「ちよつとまって・・・この機体は・・・ランカーACよ!」

俺が逃げる間、赤と蒼の機体は交戦状態になった

「てめー! クラインの部隊だな!!」

「そうだ」

ジャック・フライトの右肩武器はチェーンガン仕様だ

固定台となり右から左へ

線を描きながら連射する

「じゃあなぜ レイヴンを助ける!!!!?」

「貴様らの敵である我々が、貴様らを破壊して何が悪い?」

「く!!」

蒼い機体は孤を描いてジャック・フライトの機体に近づく

「わかったわ! あの機体はエヴァンジェ! エネミーバスターの総隊長よ!」

「そんなやつがなぜ、こんなところに!!?」

「わからない・・・でも、今は彼に甘えて退くのが先決よ!」

エヴァンジェのスナイパーライフルが確実にジャック・フライトの期待に傷をつける

「くっ・・・テメーラー!!」

「そんなに叫んでは、爆死する前に舌を嚙んで死ぬぞ」
あくまでエヴァンジェは冷静な物言いだった

ジャック・フライトは完全にエヴァンジェの策略に引っかかったのだ
突っ込んでくるエヴァンジェの機体から距離をとろうと
無理に後退したため、スナイパーライフルの有効距離にはいつてしまった

無論、距離をとらねば

それはそれで、決着がついていただろう

エヴァンジェの機体には目で見てわかる巨大なブレードがついている

左右上下にゆれるエヴァンジェの機体を

ジャック・フライトの武装では遠距離から撃っても

当たらない

地面との摩擦で火花を散らしながら

ジャック・フライトはエヴァンジェに突撃する

間一髪でスナイパーライフルを避けると

狙いを定めたかのようにグレネード弾を放った

しかし

エヴァンジェはその弾をブレードで弾き返した

高速で動いたエヴァンジェの機体は

弾を弾くと

そのままの勢いで左に移動

ジャック・フライトの横を捉えた

次の瞬間ジャック・フライトの機体のコアに穴が開いた
それはエヴァンジェの勝利を物語った

「な．．．に．．．いい．．．い！！！！」

バランスを崩し

黒い煙が出始める

もはやジャック・フライトの機体では

エヴァンジェに傷一つつけられない

むちゃくちゃに撃たれるグレネード弾は

エヴァンジェを捕らえられない

「貴様．．．なぜ．．．レイヴンを助けた．．．貴様らの．．．敵．．．
．．．に．．．．．なるかも．．．しれ．．．な．．．．．いのに．．．」

通信機能がやられているようだ

よろめきながら機体は跪いた

「次が敵とはかぎらんだろう．．．」

それは確実にこちらに向けての言葉だった

エヴァンジェがトドメをさした

「ぐわあああああー！ー！ー！ー！ー！！！！．．．．．
．．．．．」

ジャック。フライトはエヴァンジェの前に敗れ去った

「．．．．．ありがとう」

「次が敵なら容赦はしない・・・覚えておけ」
「素晴らしい残しエヴァンジェは去っていった」

レゾンデートル＼＼＼#2通信施設防衛

「おいおいおい！！これりゃあヒドイなあ・・・」

スサノンはあきれた表情で云った

「一体なにがどうなって、こんなことになるんだ??」

<アエネアス>は頭部・コア・両腕破損という最悪の状態だった
「・・・直らないか？」

「ん・・・破損したパーツは買い換えるしかねえな・・・」

「やはり、そうなるか・・・」

「むしろ組み立てなおした方がいいかもな・・・」

それが得策だろう

たとえ元に戻ったとしても

このままの武装では、到底エヴァンジェには勝てない
レイヴンを名乗る以上

奴と戦闘になることは、間違いないのだ

「ガレージショップに行ってくる」

「いらっしやいダンナ！！新しいパーツが入ってますぜ！！」

この男はガレージショップ店長のシード

毎回この男には世話になっている

「ACを1から組みなおすから、プログラマーとエンジニアを呼んでくれ」

「ありがてえ！！毎度あり！！！！」

こちらはとても陽気には、なれなかった

シードという男は、見た目以上に仕事の速い男だ

数十分の間で、ACを組み立てる準備が整う

ガレージショップでは、ACのパーツ購入やテスト走行も可能だ

「それで？どんな仕様に組みやしようか？」

口ぶりはふざけているが、顔は真剣だ

「重量は中級、機動力を確保してほしい・・・あと武器は今あるやつと肩の武器を両方買い換える」

「わかりやした・・・では、こちらがリストです」

小一時間が経過した

やつとのことで基本部分が決定する

あとは、内部だ

ロック距離を左右する＜FCS＞

ACが動く元・・・つまり心臓に等しい＜ジュネレーター＞

その他にもさまざまなパーツが存在する

「どうですか？ダンナ」

「・・・なかなかいいんじゃないか・・・？」

そう笑いながら答えた

全てのステータスは以前よりもはるかに上を指す

「色はどうしますか・・・？」

エンジニアの青年が問いかける

「色か・・・黒を基調にしたので・・・」

「わかりました！」

元気のいい返事だった

なにやら久しぶりに気持ちがハレてくるような気分だ

「ダンナ！一番大事な名前！！どうするんです？」

そういえば考えなかった

何がいいか・・・？

自分に問いかける

そうだ・・・

一つの＜答え＞が浮かび上がった

「レゾンデートル・・・かな」

「わかりやした！！」

「おお！かっこよくなって帰ってきたじゃねえか！！」

スサノンはうるさいぐらいの声で出迎えてくれた

「レイブン、すでにアリーナへの新機体登録は完了しました」

シフがコツコツと高いヒールを鳴らしながら歩いてくる

「何かテストができる依頼はあるか？」

「もちろんです」

シフは見た目どうり仕事がはやい

むしろ、俺の周りで仕事が遅いのは

スサノンぐらいだ

「っで？その依頼ってのは？」

「とある施設を小隊から守る・・・という内容です」

「ほお・・・確かにテストにはもってこいだ・・・！」

「目的地への到達を確認」

シフからの通信がはいる

「これより戦闘モードに移行する」

今回は空からくる数十体の戦闘機の撃墜だ

「敵機確認・・・数5・・・前方より来ます・・・！」
「捕捉！！」

今回の仕様は非常にレーダー機能が強かった
5機の戦闘機がV字の陣形を保って飛んでくる
右肩の武器は4連ミサイルだ
すぐさまロックオンを開始する

ロックオンを確認する点のようなマークが表示される

ミサイルがスイッチを押すと共に飛んでいく
先頭を除く4機は墜落した
そして先頭の機体は近づいてくると同時に
マシンガンで打ち落とす

「増援を確認・・・数5・・・後方です」
「了解」

それから何度か同じことの繰り返しだ
どうやらこの機体は、なかなかの完成度のようにだ・・・

30機ほど撃破した
そろそろ最後の部隊が来るだろう

弾はまだ十分にある

「敵増援を確認・・・数1・・・そんな・・・ランカーAC！！
？」

「またか！？」

どうしてここまで運がないのか・・・
今回の依頼主もクリス・クライン側だ
エヴァンジェが敵機としてレーダーに映るとは思えない

「ランカーACの正体がわかったわ・・・こいつはヴァッフハフント
よ」

とんでもない奴が来た

やつはアリーナの下層の人間だ
しかし、実力はそれ以上だ
と云うのも、奴は新人狩りを好んでいるゲス野郎
機体の名前は<ルーキーブレイカー>とふざけている

「貴様・・・レイブンか・・・同胞といえど・・・いや・・・同胞
だからこそ手加減はせんぞ」

鼻で笑いながら突っ込んでくる

すると目の前ではねた
ヴァッフハフントの機体は逆関節の機体だ

ジャンプ力に優れている

戦場をピョンピョン跳ねながら撃ってくる
奴は武器が一緒になった腕を装備している
弾切れを狙えば勝機はこっちだ
しかし、雨のように打ってくるその弾を避けるのは
至難の業だった

「どうした？ 哀れな新人のようだぞ？」

苛立つ

もしこいつを撃破してパイロットが無事なら
殴りつけてから踏み潰してやる！

などと余裕をもって考えていた

確かに強い！

その一撃は確実にダメージとなる
しかし

こちらが負ける確立は低い
なぜなら・・・

「ん？・・・なんだ・・・？」

レゾンデートルからおびただしい量の光があふれる

考える暇を与えず

奴の機体にマシンガンを浴びせる

ヴァッハフントは不意をつかれた
斜めにSの字を描きながら後退する

しかし

スピードを強化したこの機体で追いつけないわけがない

下がりながらも打ち続けるその弾を
浴びるように受けながら、前進する

これはテストプレイだ
わざわざ避けるつもりはない

「なんだ・・・それは・・・!!?」

答えてやるつもりはない
ただ一言

「新人ばかり相手にするからさ・・・!!」

左肩から斜めにコア・右腕と切りつける

威力の上がったレーザーブレードが
ヴァッフントを再起不能へ追いやった

「ふんっ・・・そんなことが・・・いつまでも続くと思うなよ・・・」

「負け押しみか？」

「いつまでも、そこに居れば・・・いつか滅びる・・・」
何のことかさっぱりわからない

「世界は確実に2つに分かれる・・・その名をいつまでも語れるとおもうなよ・・・レイブン!!!!!!」
「!!!!!!?」

「どういことだ・・・!?」

それに答えることはなかった
ヴァッフハフントは、それだけ言い残すと
跡形もなくふきとんだ

少し離れた高台に、2機のACが立っていた

「失望だ・・・」

「殺りますか？アレス」

2機のうち一体は赤い

どうやら赤い機体がアレスというらしい

「ほうっておけ・・・すぐに散る」

「わかりました」

「今の機体は一体・・・？」

任務完了です帰還してください

レイヴン・・・お疲れ様」

＼BW3309＼#3軍事基地制圧

差出人 クリス・クライン

先の戦闘見事だった。まずは祝杯を述べておこう

私はクリス・クライン

知ってのとうり、独立国家「シユクリンド」を導く者だ

やつら「アーカイプ」の連中は私を、冷酷な独裁者と謳っているが私は誰よりも民を愛し、平和を願っている

この姿勢に賛同してもらえるなら、どうか我々と共に戦ってほしい

差出人 エヴァンジェ

先日の戦闘はご苦労だった

ヴァツハフントを撃破したことは大義に値する

おまえほどの実力があれば

こちらでもまあ役にたつだろう

これからおまえの活躍に期待している

「以上がメールの内容です」

「クラインはともかく・・・エヴァンジェのは嫌味か？」

どちらのメールもエネミーバスターに遵えという内容であることは、明白だった

ここ最近、依頼を遂行したのはクライン側のモノばかりだ
こんな中傷メールじみたモノが来ても、いたしかたない

「ちようど、アーカイプ側の依頼がありますが・・・？」

中立だとわからせるには、これほど適した依頼はない

内容はロベラーズ・ガーディアンと共にシュクリンド軍ミサイル基地の制圧だ

「受けようじゃないか」

「わかりました」

ロベラーズ・ガーディアンと共に行動するということとは少なくともアーカイブACを確認できるということだ
もちろん、むこうもこちらを確認するだろう

予想をはるかに超えた状況だった

なんとロベラーズ・ガーディアンの全てのACが集結していた

「きさまか・・・」

そこには、あのアレスと呼ばれていた赤い機体があった

「まあいい・・・ルナ、今回の作戦を教えてやれ」

「了解しました」

そう返事をしたのは、赤い機体のそばに居た黄色い機体だった

「本作戦は、地上部隊と地下潜入部隊と増援部隊に分かれます」

声からして女性だとわかった

「レイヴンを含む3機は地下に潜入し防衛システムを破壊、その後地上部隊と合流してもらいます」

「わかった」

安易な返答をした

どうやら今回は、おとりとして地上部隊が進行
そして潜入部隊が地下施設を破壊し、基地そのものの防衛力を無力化
その後、おそらく敵ACと戦闘になるだろう
そこへ、増援部隊と挟み撃ちにする
シンプルな作戦だ

「いくぞ・・・」

ソレを合図に総勢23機のACが動き出した

どうやらアレスがロベラーズ・ガーディアンの総隊長だろう
すさまじい活躍ぶりだ

「もたもたするなレイヴン」

「こちらも行くぞ」

潜入部隊である俺たちも動き出す

地下ゲートには、4つの入り口がある

一つは今、地上部隊が戦闘しているところにある

「どれが当たりだろうな・・・」

笑いながら潜入部隊の一人が云った

「レイヴンは西を、我々は東と南から潜入します」

「しくじるなよ」

いきなりアレスからの通信だった

戦闘中のはずなのに、ずいぶん余裕である

西側ゲートには高火力MTが3機ほどいた
曲がりくねった通路のおかげでまったくダメージを追うことなく撃

破した

が、どうやらここが当たりらしい

ミサイル基地には当然ミサイルがあるのだが

通常の工作員が通る通路とミサイルが発射される通路がある

工作員用通路の一つは今、戦闘中の場所だとわかっていた

つまり、＜当たり＞とは一直線ではない工作員用通路のことだ

曲がりくねった通路と幾多にも分かれるゲートは

潜入を混乱させる

「な・・・なんだこいつは!!!」

「どうした・・・？」

突然、潜入部隊の一人から通信がはいる

「く・・・こいつら・・・MTじゃない・・・これは・・・バ・・・

」

通信が途絶えた

「一体何がどうなっている・・・!!!?」

まったく状況がわからない

「きゃあああああ!!!・・・」

もう一人も殺られたようだ

「レイヴン、あとはお前だけだ・・・報酬は上乘せしてやる
至急基地内の状況を把握しろ・・・!!!」

「了解だ」

通路を幾多も曲がり

いくつかゲートをとった先にミサイル貯蔵庫があった

中に入ってみると、そこには何もなかった

「これは・・・全員下がれ!!! コレは罠だ!!!」

そう、貯蔵庫にミサイルが無いということは
撤退した後ということ

それでも、防衛機能がいきっているということは
コレは敵の罠ということだ

「ほう、なかなか鋭い奴がいるな」

そう云いながら入ってきたのはエネミーバスターのACだった
無名のACだ

「他の2機を殺ったのは、おまえか？」

「他の2機？・・・ああ・・・BW3309か」
聞かないナンバーだった

「他の奴は全滅だ・・・あとはお前だけだ・・・死ね！！」

ブースターを全開にして突っ込んでくる
その瞬間、レーザーブレードが飛んできた

発射型のレーザーブレードは光の塊だ
目に見えているモノはでかいが
実際は小さなエネルギーの塊だ

軽く左へスキップして、マシンガン撃つ

敵ACは天井近くまで上昇し、エネルギーマシンガンを撃ってくる

ブースターを踏んで後退する

床との摩擦で火花が散った

すぐに敵ACは落ちてくる

少しも止まることなく

お互いが右往左往しながら弾を撃つ

どうやら敵ACはほとんど耐久力がないらしい
すぐに右腕が破損した

「ちっ・・・」

今こそ新左肩武器を使う時だ！！

前回は敵が飛行部隊だったので使用できなかった対AC用ミサイル
このミサイルは1ロックで8発同時に撃つことができる

ロックオンは狭いコンテナのおかげで簡単にできた

発射される8発のミサイルは集合して敵を追尾する

「ぐわああああ・・・」

断末魔の声を上げて敵ACは散った

外へ出る間BW3309らしきものは発見できなかった

外へでると味方ACは全て動いておらず

ただ、呆然と北を向いている

数からして増援部隊も合流していた

「来るぞ・・・」

アレスが戦闘モードに入った

見れば遠くから何かが来る
誰でもわかる

あれはエネミーバスターだ

その先頭にいるのは間違いなくエヴァンジェだ

全ての機体が戦闘モードに入る

ほんの数分で戦闘が始まった

もはや肉眼では敵か味方かわからない

実弾が飛んでくる

運良く着弾はしなかった

とっさにその弾の主に立ち向かう

ライフルと思われるその弾をしのぎながらマシンガンを撃つ

敵A Cは簡単に撃破できた

どうやら雇われたザコも混じっているようだ

その燃え上がる炎の向こうに

大破した黄色い機体があった

その機体を今まさにエヴァンジェがトドメをさそうとしていた
どうやらルナはエヴァンジェと戦闘になったようだ

「終わりだ・・・」

「くっ・・・」

ルナが死を覚悟した

リニアライフルが放たれた
その間に飛び込み
レーザーブレードで弾を蒸発させた

「レイヴン……貴様……敵対するなら、容赦はしない……
！」

別の方向から弾が飛んできた
アレスだ
赤い機体は蒼い機体に立ち向かう

「レイヴン……なぜ、助けた……」
大破して少し通信機能がやられているようだった

「今は仲間だから……かな？」
いたずらっぽく云った

「そうか……ありがとう……」
思いもよらない言葉にどう返事をしていいかわからなかった

逃げるように他のACに立ち向かった
すると

「BW3309の回収が完了しました」
そんな通信が全機にはいる

「退くぞ……」
エヴァンジェは他のACをつれ退却した

「こちらも退くぞ」
アレスもまた同じように去っていった

後日以下のメールが届いた

差出人 アレス

ルナをすくったこと・・・感謝する

＼BW3309＼#3軍事基地制圧（後書き）

感想お待ちしております

くスネーク（前編）く#4 反逆者消去

高火力の高速のエネルギー弾が飛んでくる
ロック式でないため

無用な動作は避けなければならない
案の定、弾は着弾し

くアエネアスくの左腕は吹き飛んだ

「どこへ、連れ出した!!?」

無我夢中で叫んだ

「教えてもいいが・・・もう使い切ったぞ？」
笑いながら答える

「結構モロかったなあ・・・何の成果も無かったよ・・・」
さも残念そうに、しかし、それでも声は笑っていた

「貴様ああああーーーー！！！！！！！！」

怒りを抑えられず

ただ前進しながらマシンガンを撃ち続けた

オレンジ色の機体はすでに炎上し、黒い煙を上げていた
敵の緑と黒の迷彩柄の機体は、余裕を持って狙いをつける

目の前が白く光る

嫌な感覚が体を通る

「うああああーーーー！！！！！！！！！！」

機体は大破したが、爆発まではしなかった

「今日は、帰るな・・・んじゃ！またな！！」

最後まで声は笑っていた

「逃げるな……！」

ただ呆然とそこに居るしかできない

「スネー！　！！！！！！！！！」

喉が潰れるほど

聞こえるはずのない、怨敵の名を叫んだ……

その声はかすれ

目は深く閉じた

「レイヴン？・・・レイヴン！！」

耳元でそう呼ばれ、体が無意識に硬直する

「大丈夫ですか、レイヴン？・・・すぐくうなされてましたよ？」

「大丈夫・・・嫌な夢を見ただけだ・・・」

それは、忘れられない悪夢だ

「痛っつた!!」

どうやら、ACのコックピットで寝ていたらしい頭をぶつけてしまった

ACのコックピットはコアの後ろについている

「んなとこで、寝てっから変な夢を見るんだよ！」

笑いながらスサノが弾の補充をしていた

「スサノン!!! レイヴンはお疲れなんですよ!!!」

「どうして俺には厳しいんだ・・・？」

「なあ、シフ……」

「はい？」

「自分の存在理由って・・・なんだと思う？」

「へ？」

突然の質問に、シフはとまどった

「いや・・・忘れてくれ・・・」

いつも、あのことを思い出すと

そんなことを考えてしまう

「ほら！補充完了！！いつでもいけるぞ？」

俺は、コックピットから降りると

真っ先に依頼を確認する

サッと目を通す

コレといった依頼はない

「地下爆発物回収・・・運河安全確保・・・国境線襲撃・・・通信
基地破壊？」

この間守ったところを、こわせってか・・・？」

そんな皮肉をこぼしていた
すると

「反逆者消去・・・か・・・」

なぜか＜反逆者＞という言葉が耳に刺さった

内容は、そのまま反逆者を抹殺するというもの
しかもACだ

敵戦力に加わる前に排除すのは得策だ

「おいおい！数ある中からエラくグロイのを選ぶな！」

あきれたようにスサノンは笑った

「そうか・・・？・・・どれにしろ人を殺すのに代わりはない・・・」

一人ですむなら、それでいい」

「決まったようですね」

シフがかなり遅れて近づいてくる

A Cに登って起してくれたからだろう

普段はA Cに登ってこない、ゆえに

彼女はA Cから降りるのになれていない

A Cから降りるには、それなりにコツがあるのだ

「ああ・・・どこの依頼だ？」

「クラインです」

「またか・・・」

どうやらクラインとは、変な関係にあるようだ

「どうしてまた、こんなところに・・・」

そこは迷路といっても過言ではない

元MT開発工場だ

「目標はどうやら建物の中央に居るようです」

「リョーカイ・・・行ってくる」

当然だが、攻撃してくるMTは見当たらない
時折爆発物が突如爆発する

そのせいで3箇所も道がふさがった

「このゲートの奥に居るようです」

ゲートが開く

そこには信じがたい機体が立っていた

「なんだ？追ってか・・・？」

そこにある機体は、黒と緑の迷彩柄だった

「貴様・・・スネークか・・・？」

静かに怒りがわいてくるのを感じる

「ん？・・・スネークを知っているのか？」

どうやら別人のようだ

しかし、スネークとかかわりがあることは明白だ

「君の婚約者は、生体電波が常人の域を超えている！！これは偉大な科学の第一歩だよ！！」

白い服を着た科学者が、うれしそうに云った

しかし、自分の婚約者が今まさに実験体にされようとしていた

「ふざけるな！！」

結果資料を掃い飛ばした

「何を怒っているのだ？君から説得さえしてくれれば

いつでも実験は最終段階までいけるのだぞ！！？」

意味がわからない

どこの誰が自分の婚約者を生体兵器を作る実験に賛同するものか

「エレナは、それほど体が丈夫なわけではない!! そんな実験をすれば死んでしまう!!!!!!!!!!」

俺は実験室を飛び出した

後ろで科学者が何かをつぶやいた

「こんなことで・・・実験を終わらせるものか・・・」
しかし、振り返ることなくガレージへ向かった

「ヴァン! おかえりなさい!」

エレナが笑顔で出迎えてくれた

シフをナレーターに雇う前はエレナがナレーターだった

「おうおう! 新郎の登場か?」

スサノンはいつもどうり

嫌気を感じさせない嫌みを云った

「顔色が悪いみたいだけど・・・どうかしたの?」

「いや・・・なんでもない・・・」

見つめられて俺は照れ隠しに依頼に目を通した

「あっ! ちょうどさっき依頼があったのよ!」

云うなりエレナは依頼メールを開いた

「廃棄工場跡調査・・・か」

この頃はまだアエネアスを組み上げたばかりの駆け出しレイヴンだった

「よし! コレにするか!」

「うはー・・・雰囲気あるなあ・・・」

オンボロで、何を調査するのかわからない

とりあえず、歩き回って全体の構造をデータにするコトが目標だった

「ヴァン・・・気をつけてね」

「ああ・・・行ってくる！」

中に入ると無人MTが出迎えてくれた

クラッカーの変わりに実弾のシャワーで

とにかく今はデータ採取が最優先事項だ
必要最低限のMTのみを排除した

半分ほど終ると突然通信が入った

「ヴァ・・・たす・・・て・・・」

「エレナ?・・・エレナ!!」

返事がない

すぐに外へ向かう

ナレーターは作戦範囲外に停空するへりに乗っている

外へ出ると大破炎上するへりがあった

そこにはさらにACが一機立っていた

「よう！俺はスネーク！悪いが女を一人もらって行ったぜ？

科学者の奴らはほっとけて云うんだけどさ・・・一応報告しと
かないとな！」

分けがわからない

「ふざけるな・・・！」

オーバードブーストで突っ込み、ブレードを振るった

しかし

スネークは、それをかわした

そのまま攻撃することなく後退する

「な・・・なんだよ？金なら払うって云ってたぜ？」

「どこへ、連れ出した！！？」

「答えろ・・・スネークはどこだ・・・？」

今は別の主が乗っている迷彩柄の機体に問い詰める

「は？なんだお前？図に乗るなよ！ああ！！？」

果敢に飛び込んでくる

弱い

弱すぎる！

すぐに、エネルギーは使いきり

動きが鈍くなる

マシンガンのシャワーをあびせる

機体に無数の穴があく

エネルギーが回復し、また動き出した

「調子にのんじゃねえー！！！！！！」

ムチャクチャに撃つ弾はどれも外れて壁に、天井に当たる
天井の一部が崩れて機体におちた

「ぐわ!!」

すぐさま後ろに回りこむ

「スネークは、どこだ・・・？」

「し・・・知らない・・・！頼む！！見逃してくれ！！！」

「なんだ・・・知らないのか・・・クズが」

後ろをコックピットごと切り裂き、パイロットは蒸発する

まだ機体は原型を保っている

その機体にむかってマシンガンを撃ち続けた

かつての科学者達に向けてはなった時のように・・・

「なんだよ？そんなに俺が嫌いかな？」

崩れた天井にA Cの影があった

「おまえは・・・」

「よっ！久しぶり!!」

口ぶりからいてコイツが正真正正のスネークだ!!!

くスネーク（後編）く#5反逆者消去

タンカーに乗せられ

国立病院に運び込まれる

「おい！どおした！！」

隣でスサノンが叫んでいる

「スサノン・・・アエネアスを・・・俺が戻ってくるまでに・・・修理しといてくれ・・・」

声が詰まる

それだけ云うのがやっとだった

スサノンは何かを云っていたが聞こえなかった

怪我はそれほどひどくなかった

手術は3時間で終わり

入院することなくガレージへ向かった

実際手術は1時間程度の傷だったが

担当医に、ある要求をした

「おお！帰ったか！！とりあえず、破損部位は買い替えといたぜ」

スサノンが云うのを聞き流しACに乗り込んだ

「すぐ戻る・・・」

「ん？あ・・・ああ・・・ところでさっきからエレナの姿がないんだが？」

目の色が変わる

レバーを握る手に力がある

「取り戻してくる・・・」

「あゝ・・・やっぱり体の方が先にまいっちゃったか・・・」

科学者の一人が残念そうに云う

「しかたねえよ・・・とりあえず貴重なサンプルだ！解体して保存しておこう」

女性の遺体にメスを入れる準備を始めた

体に、切り出す部分の下線を入れる

「保存液もってこい！！」

別の科学者が下っ端に命令する

すると、急にガタガタとゆれだした

「なんだ？地震か？」

しかし、窓がカタカタ鳴るのに対し

ゆれはそれほど強くない

突然、轟音が鳴り響く

窓が割れ

熱気が入ってくる

資料は次々と炭化していく

一部の薬品は炎上する

天井が左から右へ崩れる

そこに立っていたのは

オレンジ色と灰色のアーマード・コアだった

「エレナは・・・どこだ・・・？」

低い怒りに満ちた声が、轟音の中、確実に耳に届く

「ひ・・・」

「どこだ・・・？」

崩れ去った施設に閉じ込められ

科学者達は、恐怖する

「女なら・・・そこに・・・」

震えながら答える

そこには白い布で覆われた哀れな女性の遺体が

台にくくりつけられていた

顔には太い線が引いてある

A Cの手が遺体を優しく抱き寄せる

「たたた・・・頼む・・・見逃してくれ・・・!!」

それが失言だった

もし、その言葉を云わなければ

生きていたかもしれない

崩壊寸前の研究所に、マシンガンが放たれる

全ての資料が一瞬で焼け

薬品は混ざり合ってガスを出すものもあった

機器が崩れ

科学者達の悲鳴と体液が研究所を埋め尽くす

一人残らず液体のみをのこし消えていく

そこは、数分のうちに焼け野原となった

ただ、普通の焼け野原と違うのは

黒ではなく深紅の光景が広がっているということだ

「スネーク……」

怨敵の名を静かに呼んだ

「なんだよ？んなに怒るなよ……？」

意味がわからないといった感じで答えた

天井に居た機体が、落ちてくる

それは、細い軽量型の紫の機体だった

両手にハンドマシンガンを装備している

「もしかして……まだ、あのこと引きずってんの？？」

今思い出したかのように云い始めた

「あれはあく依頼だったんだから、俺が恨まれるのは……筋ちがいっしょ？」

おどけていった

たしかに、依頼をこなしただけなら

恨むのは筋違いだ

こいつが、開発チームの一人でなければ……

いきなり後ろのゲートが開く

入ってきたのはエヴァンジェだった

「レイヴン？……ここで何をしている？」

「クラインからの依頼で、裏切り者を始末した」

冷静に答える

「ふっ……わざわざレイヴンなど雇わずともよかったのに……」

「

さらに奇怪が続いた

ゲートと反対側の壁が崩れ

そこから赤い機体が現れた

アレスだ

「レイブン・・・それにクライン側のリーダーか・・・」

「なぜ、貴様もここに？」

当然の質問をエヴァンジェがする

しかも臨戦態勢に入る

「今日は貴様らにかまってるほど暇じゃない・・・スネーク・ヒルマン・・・貴様を排除する・・・!!」

どうやら、アレスの目標はスネークのようだ

エヴァンジェが、近寄ってくる

「ほう・・・ちょうどいい・・・ここで貴様を消してやろう・・・いくぞ・・・」

それはアレスに向けてだった
しかし

「何をごちゃごちゃ云ってるかはしらんが・・・今はヴァンと話してるんだ・・・」

そういうと、マシンガンのアレスとエヴァンジェに向けた

「失せろ・・・!!!!」

云うと同時に、弾が撃たれる

2機とも数発は着弾したが
ダメージは確実に避けた

「貴様・・・敵対するなら容赦はせん・・・!!」

エヴァンジェが交戦体制に入った

「コイツは俺がしとめる・・・」

レゾンデートを戦闘態勢に持ち込む

3対1の戦闘が始まった

アレスのエネルギーライフルが
エヴァンジェのリニアライフルが
そして、俺のマシンガンが火をふく

しかし、スネークの機体にはかすりもしなかった

どれか一発は当たってもよさそうなものだ
が、スネークは全ての弾を完璧に避ける

対AC用ミサイルすら
この状況下で外れる

すると、アレスが間合いに入りブレードを展開した
瞬間、スネークの機体が残像に変わる
スネークはアレスの側面へ移動していた

クイックブースト

最新技術により可能になった機能で
ブースターを瞬間的にオーバードブースト並の爆発で使用する

「ちっ……」

アレスの機体は空を切り
大きなスキを作った

「おいたが、すぎたな……?」

アレスの機体にマシンガンを浴びせた
「ぐっ……!!!」

アレスの機体は再起不能へおちいった

そのままアレスの機体はエヴァンジェにぶつかった
「……!!! 貴様、邪魔だ!!!」

そのままの流れでエヴァンジェもマシンガンを受け
再起不能へおちいった

スネークは、一瞬のうちに
一国のトップランカーACを撃破した

「さ、あの世にいてもらうかな・・・あるいは、生体兵器にして
やろうか・・・？」

笑いながらスネークは二人をロックする

「おい・・・!!」

「ん？」

「俺が残ってるぞ・・・!!!!!!?」
静かに応える

「・・・っで？」

まるで眼中にないと云った感じた

目の色が青から緑に変わる
レバーを握る手に力が入る

「・・・死ね」

機体は今まで以上の動きをする

「・・・!?!?っふ・・・楽しめそうじゃねーか!!!!!!」

スネークはクイックブーストで目の前に現れた
両マシンガンが放たれる

弾は近距離で着弾した
しかし

レゾンデートルからは、おびただしい量の光の粒子が飛び散った
「それは・・・!」

「エレナ・・・」

愛しい人の名を、開けたドームの天井へ向けて云った
青い空が

よりいっそう青に見える

「・・・？エレナ・・・？」

そう云ったのはエヴァンジェだった

「なぜ貴様がくプラン・バイオウエポンの最高機密のナンバー名
を知っている？」

その言葉は、俺に新たな怒りを呼んだ

～セイバー～＃6 潜入部隊救助

「バイオウエポン・・・？」

初めて聞く単語ではない

しかし

それは簡単に受け入れられる言葉ではない

「まだ、そんなものを作っているのか・・・！！？」

「答えるのは貴様だ・・・なぜ機密ナンバー名を知っている？」

エヴァンジェの機体にマシンガンを向ける

「なぜ・・・そんなものがまだ、この世界にのこっている・・・？」

「脅しのつもりか？・・・答えるのは貴様だと云ったはずだ」

マシンガンが火をふく

エヴァンジェの機体は

いつ炎上してもおかしくない状態になる

「そこまでだ・・・！！！！！」

ゲートが開き

エネミーバスターのACが入ってきた

ACは止まることなく

こちらに突っ込んでくる

フロート型の白いACだ

「エヴァンジェさんは、殺らせない・・・！！！」

エネルギーライフルが放たれる

「どけ！」

ブースターを全開にして前にでる
弾を受けながらACの前へ出る

突然、全ての機体が動きを止めた
否、とめたのではない
止められたのだ

「BW3304か・・・」

エヴァンジェはそういうと

味方のACに命令する

「退くぞ・・・」

「はい！」

フロート型ACはエヴァンジェを機体ごと回収して去っていった

2機が姿を消すと

ACは動きだした

アレスに背を向け

2機が消えたほうへ走った

今なら間に合うかもしれない

まだ、聞かねばならない事がある！

しかし、2機の姿は確認できなかった

「んゝ・・・やっぱミサイルは2つもいらなな・・・」
翌日

やっとその事に気づいた

MT用とAC用に分けてつけたつもりだったが
はてしなく片方は無用だった

「はずすとして、何をつけるんだ？」
スサノンはバランス計算を始めた

そのまま何もつけないのも、一つを選択肢だが
それでは重心が片方に寄ってしまう

「ショップできめるか・・・」

「いつもごひいき、感謝です!!」
シードはいつもどりの出迎えだった

「新しい肩武器がほしいんだが・・・何がいい？」
シードはリストを取り出すと

<NEW>

の記述に指をさした

「先日入った新作です！エネルギー砲だすな！！」

バランス的にも悪くはないだろう

「じゃあそれにするか・・・」

「ありがとうございます！！」

「あら？私の分は残ってる？」

突如後ろから女性の声がした

振り向くとブロンド、長髪の少女が立っていた

歳は17、8といったところだろう

とても大人びている

「もちろんです！！」

「そう・・・ところで、こちらの方は？」

こっちに目線がきた

「レイヴンの・・・ヴァン・D・クロイツ様です」

「君は？」

あたかも興味がないような口ぶりで聞いた

「ルナ・エーシェンよ」

背筋に寒気が走った

間違いないだろう

この娘が、あの黄色い機体に乗っているルナだろう

「君もレイヴン？」

確かめるように聞く

「いいえ・・・アーカイブよ」

確信した

「アナタは、アーカイブ派のレイヴン？それとも・・・」

「中立」

みなまで言わず

そう答えた

「そう・・・クライン側ならここで始末しようと思ったのに・・・」
残念そうに、そう云った

どうやら冗談では、なかったようだ

「このケーキ、おいしいんだから！」

笑顔でカウンターから、綺麗な焼菓子をとった

「なぜ・・・君と食事するんだ・・・？」

「あら？女性をエスコートするのは、ジェントルメンの仕事でしょ？」

あたかも当然のように云った

「あなたに聞きたいコトがあったしね・・・」

「そうか・・・奇遇だな」

店員にコーヒーを注文し

テラスへ移動した

「聞きたいこととは？」

席に着くと、単刀直入で聞いた

「あなた・・・黒いACに乗ったレイヴン知ってる？」
確実に自分のことだ

「さあ・・・どの黒いACなのか・・・」
とぼけて云う

「えっ・・・そんなにあるの？」

てつきり1体かと、思ったのに・・・」

事実、黒いACはレゾンドールだけだ

「あなたが、聞きたいことって？」

「その前に・・・参考なまでに聞いておくが
なぜ、その黒いACを探しているんだ？」

食べていたケーキの手を止めた

「そんなの・・・気に入らないからにきまつてるじゃない・・・」
ま、人探しの大半の理由はそんなものだろう

しかし、ルナに恨みを買うようなことをした覚えは無い

「何か気に入らないことが、あったのか？」

「別に・・・されたわけじゃない・・・命も助けてもらった・・・
でも、だからこそアレスの敵になった時・・・もし、アレスに万が
一のことがあったら」

どうやら、この娘の忠誠心は国ではなくアレスにあるようだ

「そうなる前に、あいつは私が討つ」

「アレスはそのレイヴンに負けるようなやつなのか？」

「ばっ!!!!!!!!!! そんなわけないじゃない!!!!!!!!!!」

無理やりにケーキを口に運んだ

「それで？アナタが私に聞きたいことって？」

「ん？」

「あるんでしょう？」

「あ・・・ああ」

忘れていた

なぜ忘れたのか、よくわからない

妙に無邪気で、純粋なこの娘を見ると

とても、仕事の話などできない

「君はなぜ・・・アレスに信頼を置く？」

それは聞こうとした質問ではなかった

「・・・・・・・・すくってくれたから・・・・私達を・・・・」

「ほう・・・・」

「・・・・云つとくけど、昔話なんて始めないから・・・・！」

「な・・・・」

そこまで深刻に話したら

回想シーンに飛ぶのがお約束だろう

かなり、気になる

「ねえ・・・・どうして中立にいるの？」

「は？」

「どっちかに、つかないの？アーカイプか、シュクリンドか」

深刻な表情で訴えてくる

「つかない・・・・」

「どうして！！？」

「守るものが・・・・あるからかな？」

ふざけて答えた

「ふざけるな！！！！！」

突然、ルナは叫んだ

その周辺にいた全ての人間が静まりかえる

「本当に、守るものがあるなら中立になんか居れるわけがない！！」

そんなの、責任から逃れるためのいいわけだ！！」

どうやら、彼女の癪に障ったようだ

何を云っているのか、自分でも理解できていないだろう

云ってるコトがメチャクチャだ

「なぜ言い訳になる？」

「守りきれなかったも、まったくの他人なら

なんとも思わなくてすむ・・・・もし、お前がアーカイプの軍人で

アーカイプの民が死んだとする・・・・お前にその悲しみが理解でき

るか！！？」

すこし涙目になって叫んだ

「・・・失うことのつらさは、誰よりも知っている」

「うそだ!! それを知っているなら

中立に居るわけがない!!」

おまえの守るものって一体なんだ!!!!!!!!!!?」

「この、今ここに存在する全てだ」

「そんなもの・・・守りきれぬわけが無い!

結局おまえらレイヴンは、お金のことしか考えていない!!」

「なぜそうなる?」

あくまで冷静に答える

「お前らは理想を並べて、金のためなら街一つ簡単に焼くだろう!!
結局、助けてくれるのは・・・」

そこまで云うと言葉に詰まった

大方、この娘のアレスへの忠誠心がどこから来るのかは想像できた
おそらく、昔自分の街がレイヴンに襲撃され
それを阻止したのがアレスなのだろう

急に、ヴァッハフントの言葉が脳裏を走った

「いつまでもそこに居られると思うなよ・・・レイヴン!!!!!!」
「」

「俺が、黒いACのレイヴンだ」

「何!？」

ルナの表情が変わる

なぜ、急に打ち明けたのか

自分でもわからない

「どうする?ここで俺を殺るか?」

ルナは迷っていた

彼女の内ポケットには、粗末なつくりの拳銃がある

「次に、戦場であった時・・・お前を討つのは私だ・・・」
ルナは、元来た道を進んだ

「ん?・・・おい!ケーキ代は?」

「女に払わせる気か?」

「はいはい・・・」

チラッと、領収書を見た

「おお!!」

声にならない声を声にした

その焼菓子代は軽くACパーツ並みの金額をほこっていた

目線の先でルナを探したが

見つからなかった

最初から奢らせるつもりだったのだろう

カモられてしまった

「おい！どうしたんだ？顔が青いぞ？」

ガレージに戻ると

すでに新しいパーツが装備されていた

「いや・・・ちょっとな・・・」

「レイヴン！早速ですが、依頼が来ています。＜緊急＞とのことですよ」

依頼内容は、施設からの人命救助だ

依頼側は、アーカイブだ

「緊急だろ？急ぐぞ」

「はい」

そこは山沿いにある施設だった

谷の間にあるその施設の前には、巨大なダムがある

「つで？どこに居る？」

「この施設の資料保管場所だそうです」

事前に入ったデータによれば

保管所は一番奥だ

中には設置型のガードロボがいたるところに配備されている
帰るときのことを考えて、全て撃破した

資料所には、破損した潜入ポッドがあった
その隣に、人が2人手を振っている

「助かったよレイヴン！恩にきる！」
もともと一人用のコックピットに3人押し込む形で入った

帰路は、スムーズに進んだ
道は、覚えている
この先のゲートを3つ通った先は出口だ
しかし

「熱源反応をキャッチ！！数は3！！！新手のACかも・・・レイヴ
ン気をつけて！」

「お・・・おい、大丈夫なのか？？」
一人が挙動不審に陥る
「心配ない・・・」

そこに居たのはACではなかった

六本の脚に

甲羅のような背中

クワガタかアリかどちらかの頭

ところどころに、鉄でもケーブルでもない

明らかな肉体がある

額にはくBW3309>と書いてある
間違いない

こいつらが、バイオウエポン
つまり、生体兵器だ！

ナンバーからして

軍事基地制圧の際

2機にACを撃破したのは、こいつらだ！！

3体の兵器はそれぞれ違う動きをして襲い掛かってきた
レーダーには反応が無い

それは、こいつらが生物であることを物語った

速い！

壁を自由に動く<それ>は、あらゆる方向から襲ってくる
マシンガンは簡単によけられる

「おい！！当たってないぞ！！」
みればわかる

<それ>は宙を舞って、こちらに突進した
鋭い爪のような脚が、機体に傷をつける

「イ・・・イヤダ・・・死にたくない・・・死にたくない・・・」
「おい！なんとかしてくれ！！レイヴン！！！！」
「わかってる！！」

しかし、どうすることもできない
一撃必殺で飛んでくる突進を
避けるので精一杯だ

「助けて・・・助けて・・・助けてくれーーーー！！！！！！」

その時、エレナの最後の通信が耳を通った

「ヴァ・・・たす・・・て・・・」

目の色が変わる
レバーを持つ手に力がある

「あんた・・・その目・・・強化人間か・・・!!!!!!」

強化人間

その字のとうり、手術によって超人的力をえた人間を
強化人間という

オーバードブーストを発動する
本来なら失神するほどのGがかかるが
強化人間になってから
それがない

案の定、救出した2人は、失神した

飛び掛ってくる生体兵器を
レーザーブレードで引き裂く

断末魔の声を上げて

1体は死に絶えた

壁を這いずり回る個体は

マシンガンを浴びせる

壁にたたきつけられるかのように
壁に体液を撒き散らし絶命した

残る固体は、死を察したのか
出口に走った

新型のレーザー砲が金属部を残し
肉体は蒸発した

外に出るとアーカイブの医療班が待機していた
すぐさま2人を引渡し
その場を去った

〈リターンマッチ（前編）〉#7 運搬用空母警護

「我が同士達よ！ついに、戦う時がきた！！」
演説台で、声高に叫ぶ

「エニス・マーケンファイ率いるアーカイク軍は
我々を冷酷な支配者と謳った！！
しかし！！

真の冷酷な支配者は
エニス・マーケンファイに他ならない！！！！

今！！奴らは、我らが民を！愛すべき家族を根絶やしにせんと
穢れ無き海を！母なる大地を突き進む！！！！
奴らが

これ以上この大いなる世界を汚すことを許してはいけない！！
私は、決して全滅を求めているわけではない！！

己の過ちに気づき
罪を償おうというならば
心から歓迎しよう！！！！

しかし！！
己の欲のために！
全てを消し去らんと

その罪を重ねるなら！！
奴らには罰を与えねばならん！！

私が願うのは、永久に約束される平和と！愛する者たちの笑顔には
かならない！！」

「「「おおーーーー！！！！！！！！！！」」」

大勢の兵士達が、市民が歓声の声を上げる
クラインは満足げに演説台から見渡した

ただ一人

エヴァンジェだけは静かにその場を離れた

「あゝ・・・暇だゝゝ・・・」

ここ2週間、1つも依頼がなかった

ACの肩で腕を組み、天井を見上げる日々が続いている
新装備をつけたが、そのテストすら
終ってしまっている

「こりゃマジで暇だな・・・」

スサノンが、コックピットでプログラムを見直している

ACの点検は毎日行っている
しかし、特に依頼が無いため
それもほぼ不要だ

「レイヴン、依頼です」

「おお!!」

やっときた

ACから飛び降り

依頼を確認する

依頼はアーカイブ側だ

内容は、カルナ海を進軍する運搬用空母の警護だ
味方機は全て空母に収納されており
戦闘になれば沈没は確定らしい

「面倒な依頼だな・・・」

「しかし・・・」

「ああ・・・わかってるよ」

「この海におちると回収は不可能です」

空母の上に着地すると

シフから通信が入った

「たのんだぞ・・・レイヴン」
船長らしい

当然だ

この船が沈んだら
こちらも間違いなく沈む

「敵を確認・・・戦艦が2・・・戦闘機は8!!」

戦闘が始まった

戦艦はレーザー砲で簡単に沈む

問題は戦闘機だ

海上戦で有利なのは間違いなく戦闘機だ

戦艦を沈める間

戦闘機のミサイルは全て空母に着弾している

「ちっ・・・」

飛行と着地を繰り返しながら

8機の戦闘機を撃破する

「敵増援を確認・・・戦艦2・・・それとこれは・・・ランカーA
Cミラージュです!」

ミラージュ

それは、以前エヴァンジェを救いに来たACだ
つまり、海上で有利なフロート型だ

「いっくぜーレーヴン!!この間の続きだ!!」

フロート型の弱点は、遅いことだ

否、遅いわけではない

ただ、通常のACと違いブースターが基本的についていないので
それほどスピードがだせないのだ

ミラージュが接近するまでに戦艦は片付いた
戦艦は、操縦室を狙えば一撃だ

ACがエネルギーライフルを連射してくる

海に出ると危険だ

あくまで船上で狙いをつける

しかし、それにも限界がある

「どうした？レイヴン！！！！おら！こっちだ！！」

挑発しながら迫ってきた
しかし、それが悪かった

こいつを撃破する最大のチャンスだ
一撃でしとめなければならぬ

なら・・・あそこを狙うのが最適だ

「どうした？怖いのか？」

「なに？？」

挑発にのって

さらに前進してくる

「おまえも！！海が怖いのか？？？こっちこいよ！！」

その瞬間

レーザー砲が脚部を撃った

「うわ!!!!!!」

「行ってやるよ……!!」

ブースターを踏み

海上にでる

レーザー砲の熱で脚部のブースターは機能しない

そのまま、同じところを切りつける

脚部は破損し

その機能を完全に失った

「し……沈む……!!!!!!」

ミラージュは慌てふためいた

ACは海に沈んでいく

「エヴァンジェさん! たすけて~~~~~!!!!!!」

その声はむなしく

深いカルナ海の底へ消えていった

「レイヴン、弾の補給を

まだ敵が来るかもしれない

空母には余計に弾薬を積んである

この弾の経費は向こう持ちだ

「な・・・コイツは・・・鯨か？」

空母から通信が入る

「こちらのレーダーには何の反応もありません」

目の前の海域に黒い影がうつる

「このでかさ・・・鯨じゃねえ・・・海獣だ!!」

突然、水しぶきと

不快な鳴き声と共に

海獣が現れた

額には＜BW3308＞と書いてある

「これが・・・生体兵器・・・？」

シフは、はじめてみた生体兵器に憎悪を感じる

「こいつも倒せてか・・・？」

はてしなく倒せそうにない＜それ＞にマシンガンを撃つ
とてもではないが、効いているように思えない

レーザー砲すら弾けている感じだ

ミサイルは、ロック式だ

生物には効果がない

「どうやって倒せていうんだよ・・・!!?」

＜それ＞は額にあるマシンガンx4を連射してくる
背中からはミサイルが発射される

一体誰が撃っている？

もし、この生物が己の意思で撃っているなら
たいした技術だ

まさに生体兵器だ

「口の入って体内から殺ったらどうだ？」

「馬鹿言うな！！」

しかし、ソレしかコイツを倒す手段が浮かばない

ミサイルとマシンガンは絶えず撃たれる
もはや時間の問題だ

「こいつの意識を他に向けられないか？」

「コイツの興味は俺達だけだ・・・！！」

「・・・ん？」

そうだ

良く考えれば

コイツが意識して

こっちを狙っているなら

各武装には

コイツの神経がつながっているはずだ

「喰らえ」

マシンガンをミサイルが捉え
撃つ

弾は孤を描いて着弾し
マシンガンを破壊した

ヴオオオオオオオオオオオオ！！！！

痛みを訴えるかのようにくそれゝは鳴いた

「弱点発見！！」

次々に武装を破壊していく

全ての武装を破壊すると

くそれゝはゆっくりと沈んでいった

「レイヴン助かった・・・礼を言う」

〔P・BW〕#8機密資料奪還

「こんなものが本当に・・・」

赤と黄色い機体はある資料庫の内部で
コンテナを回収した

そこには＜P・BW＞と刻まれている

「作戦完了です・帰還してください」

「ああ・・・こんなところにいつまでも居たくないな」

後ろのゲートが開く

「ほう・・・コイツが・・・」

そこには＜BW3309＞が1体立っていた
アリとクモが合わさったような外見が
一撃必殺で赤と黄色の機体に突撃する

「そんなものが当たると思っているとは・・・めでたい奴だ」

BW3309は赤と黄色の機体に

接触することなく、資料の山にぶつかった

「なぜ潜入部隊の奴らが、この程度のザコに殺られたのやら・・・」

右手に装備されたスナイパーライフルが

BW3309を串刺しにするように貫通した

それに耐えられるわけもなく絶命した

「いまから戻る・・・サンプル付でな」

今回もまたクライン側からの依頼だ
しかも、対ACと記されている

「ここんところ、ACとか生体兵器とかばっかだな・・・」
スサノンが厭きれ口調で云った
ACや生体兵器を相手にすると
ややこしいメンテナンスが必要不可欠だからだ

「ああ・・・ま、確かにな・・・すっぱかすか？」

笑いながら半分本気で云った
本当ならこの依頼断ってもいいのだが
そうさせてくれない人間が1名いる・・・

「冗談はそのくらいにして、支度をしてください」
なぜシフはこんなにも律儀なのか？

シフを雇った時、彼女は

「信頼こそ全てです」
と云った

わからないわけではないが、もう少し休ませてくれてもいい
ま、実際2週間依頼がなかったのだが・・・

目の前には、以前自分が破壊した研究所があった

「嫌な依頼だ・・・」

ここに来て

楽しいことなど、何も思い出さない

「この奥に地下ゲートがあります」

そんなところがあったとは・・・

ここを破壊した時は気づかなかった

「まずは、そこに向かってください・・・場所は通常資料庫だそうです」

「わかった」

道に迷うことなく進む

目的の場所にはすぐにたどり着いた

「ここから地下へ行して下さい・・・すでに生体兵器が潜入していますが、ほとんどが全滅だそうです。生き残っているのは4体だそ

うです」

少し気が重い

生体兵器が味方なのもそうだが
なにより、あの日以来

アーカイクを敵に回すことにだ

しかも、向こうは生態兵器を倒すつわものだ

ゲートが開く

なかから誇りが風と共に出てくる

今回の依頼は、A C撃破と資料の奪還だ

地下へ入るとさすがに敵対してくるものは何も無かった
しかし

できれば広い場所に出たい

通路では、まともにA C戦などできない

思いのほか簡単に広いところにてた

資料庫というだけあって

道は一直線ではなかった

しかも、そこには・・・

「新手か？・・・貴様は、レイヴンか？」

そこには、目標の赤と黄色の機体が立っていた

「この機体は・・・ランカーA Cじゃないわ」

「こちらを知らないのか？」

なら冥土の土産に教えてやる

おれは、シン
こいつは、セブンスターだ」

無名A C

しかし、強敵だ

「では、消えてもらうぞ・・・レイヴン！！！！！」
片方に持った資料を床に置き
突っ込んでくる

すかさずマシンガンで応戦する

シンは機体を左にそらし
瞬間的に移動した

クイックブーストだ

ますます嫌な思い出が
脳裏をかける

スナイパーライフルの音速並の弾が
レゾンデートを掠めた

こちらも止まっているわけではない
向こうの命中率は、高いようだ

摩擦で火花を散らし、孤を描きながら機体と機体の距離を縮める

銃身が長いため

このように動けば当たり辛い

それでも、弾はギリギリのところを通り過ぎていく

間合いに入り

ブレードで斬る

しかし、左に装備してあるシールドが
それを許さなかった

本来、弾の少ないスナイパーライフルを装備するなら
ブレードを装備するのが、妥当な線だ
それでも、シールドを装備するということは
今までの命中率の良さを物語る

おそらく、今までほとんどの敵を
一撃の下に撃破してきたのだろう

機体を後退させ、マシンガンを撃つ
弾は、シールドにふさがれる

シンは、絶えず撃ってくる
「ちっ・・・当たれ！」

シールドが消えた
瞬間的にオーバードブーストで
間合いを一气につめる

しかし、クイックブーストで横を取られる

さいわい、長い銃身のおかげで
弾は絶対に当たらない

上に飛び

天井付近からミサイルを撃つ

シンは、床を左にすべり

すぐにクイックブースとで右に跳ぶ

ミサイルは全て床に着弾する

爆発音が部屋全体に響き渡る

さらに、悪いことに間合いが広がった

この距離ではマシンガンはもちろん、ミサイルも当たらない
レーザー砲を構えるスキすらない

「終わりだ・・・死ね！」

その瞬間

お互いが動かなくなる

この感じは前にもあった

その時エヴァンジェは＜BW3304＞だといった

シンの後ろのゲートが開く

そこには、巨大な口を持つカバのような物体が居る

否、カバというより巨大なスライムだ

額には＜BW3304＞とある

スライムのような体がセブンスターを飲み込む

「ぐあああああ！！・・・」

取り込まれながら圧迫され

機体は爆散することなくバラバラになった

こちらに、ゆっくりと近づいてくる

「殺られてたまるか・・・！」

以前、機体停止能力を使ったのが悪かった
その対策はすでにしてある

手動で動くようにスサノンに無理を云ってつけた
両肩にある武装

それは、妨害電波を発する

案の定、機体は動き出した

コイツに金属部が見当たらない
おそらく、体のどこを狙ってもかまわないだろう
レーザーブレードでBW3304の体を
焼くように引き裂いた

断末魔の声で壁にヒビが入った

資料を回収する

しかし

それをブレードで焼き払った

地上に出る

「敵A Cは撃破したが、生態兵器が襲ってきたため資料までは守りきれなかった」

「そうですか、ではしかたありませんね。作戦終了です

レイヴン、お疲れ様」

〈リターンマッチ（後編）〉#8通信施設破壊

荒野を走る地上戦艦が10

その間を進む戦車が22

空を切る戦闘機が50

ソレを護衛するACが3

ここは、アーカイブ領土<ニドニス平野>

茶色一色の荒野の真ん中を

巨大運河の一つ<コレクテナア>が流れる

その運河の前に立ちはだかるのは

設置型拠点迎撃用可変キャノンが4

設置型防衛用エネルギーキャノンが2

戦車が10

補給用車両が2

そして

ルナとアレスの2機のAC

「敵部隊が作戦領域に入ります」

「おまえたちは、ここにいろ・・・」

そう云うとアレスは大群に立ち向かった

3機のACが、アレスに突っ込む

「貴様一人で、何ができる?」

どれも無名のACだ

「・・・なめられたものだ」

1体のACが、ライフルを撃つ
他の2体はマシンガンだ

アレスの赤い機体は宙を舞い

1体に接近する

ブレードで斬る

「な・・・に・・・!!・・・」

一撃で爆破する

ミサイルが2機を同時にロックオンする

ミサイルはまっすぐに飛び

1体に着弾する

左に孤を描きながらレーザーライフルを撃つ

肩に当たり燃え上がる

2発目は腰に当たる

そのまま動けず

ブレードで斬る

「ぐあああああああ!!!!!!!!!!」

残るは1体

ライフルを絶えず撃ってくる

後退しながらミサイルを撃つ

A Cは右に回避する

はねるように右に移動しながら

レーザーライフルを撃つ

光速で飛ぶ弾は

A Cの右足に当たり

A Cはバランスを崩す

ミサイルがコアに当たる

動きが鈍くなり、黒い煙を出す

A Cは後ろに後退していく

そこへ

レーザーがコアに、まともに当たった

時速120kmで飛んでいた機体は墜落し

地面との摩擦で

各パーツが飛び散りながら爆散した

外側にいる戦車をレーザーが破壊する

戦艦にブーストで近づきながらレーザーライフルを撃ち

ブレードで斬った

戦闘機はミサイルの雨を撃つ

しかし、どのミサイルもアレスには当たらない

右へ左へ

大地を滑りながら進むアレスには
上からの射撃はもちろん
戦車や戦艦の砲撃も通用しない

地上部隊は撤退する

しかし

アレスは逃がす気はない
追尾しながら

1機

また1機と撃破していく

地上部隊は全滅した

空にいる戦闘機は

すでに撤退していた

「作戦完了です、アレス」

「・・・」

アレスは、周りを見渡した

そこには、数々の鉄片が転がっている

「戻るぞ・・・」

方向を変え

ゆっくりと歩き出した

「これで、終わりだ」

スサノンはプログラムチェックを終らせた

「レイヴン、再びカルナ海の依頼です」

コーヒーを置き

依頼を確認する

「また警護か？」

「いえ、今回は奇襲です」

カルナ海に浮かぶ人工島

そのレーダー施設の破壊

しかし

そこにはエネミーバスターのACが居るとのことだ

「今回は、生体兵器は居ないだろうな？」

生体兵器には、毎回手を焼く

一番厄介だったのは＜BW3309＞だ
強化人間でなければ

こちらが、やられていた

しかし、もしスネークを撃破したあの時

＜BW3304＞が、その能力を使っていなければ

資料庫で、2人仲良く

あの気持ち悪い口に飲み込まれていただろう

つまり、実力で倒せたのはあの海に居た巨大な海獣だけだ

「ご安心を、海の上ですから
生体兵器は運搬不可能です」

「ここか・・・」

屋上には巨大なアンテナがある

今回は、内部に潜入し

敵ACを排除し

コントロールルームを破壊することだ

港のような場所に

岩肌を抉ったゲートがある

奥には敵MTがわんさかいる

弾を気にしながら

次々とゲートを進む

「その・・・先が・・・コン・・・ト・・・ロール・・・ル・・・ム・・・
で・す・・・通・・・信が悪いよ・・・うですね・・・」

通信が途絶える

ゲートを開くと

そこには報告どおり

ACが居た

ランカーAC

バサラ

機体名は 斬之形

ブレードと化した腕に

可変式のブースターを肩につけ

エクステンションと呼ばれるソレにも補助ブースターがついている

黒いACだ

「貴様・・・敵・・・排除命令確認・・・消去開始・・・!!」

わずかな時間で、目の前に移動した

とっさに後退するが

コアの先端に傷が入る

すかさず、その機体は横を取るよう移動し

斬りつけてくる

斬る

斬る

斬る

斬る斬る斬る斬る

斬る斬る

斬る

ただひたすら斬りつけてくる

その行動に隙がない

マシンガンは常に撃っている

しかし、決定打にかける

それから何分が経過しただろうか

機体はすでに

焦げ跡でいっぱいだ

黒い機体にはつきりとわかる

まともに当たればその瞬間に終る

その必殺の一撃は

高速で何回も繰り返される

すると、機体は後退した

エネルギー切れだろう

これが最大のチャンスだ

エネルギーが切れれば

ブレードは出せない

一気におわらせる

後退する機体を追いかけた

レーザーブレードが

黒い機体を深く切り裂いた

「敗北……」

そのまま機体を蹴り飛ばし

コントロールコンピューターにぶつけ

爆発する

「レ……ヴン……レイ……ヴン……レイヴン!!!
レイヴン!

通信が回復したようですね……早く外に!!!施設の自爆装置の発
動を確認しました!!!
のこり5分です!!!」

外に出たと同時にゲートは崩れ
施設は崩壊した

「危なかったですね……
レイヴ「許さない……殺す……殺してやる……レイヴ……」
ン!!!!」

突如、割り込み通信が入る
港の中心にヒビが入り

〈リターンマッチ（後編）〉#8通信施設破壊（後書き）

今回で物語の半分が終了です

ご意見ご感想及び

出演希望ACをお待ちしております

出演希望ACは

名前と

機体の色と

装備の種類をお忘れなく！

＜例＞

エヴァンジェ 青 リニアマシガン

プロローグ2 後編

「どういうつもりだ？」

アレスの前に

数十人の人間が立っている

その先頭にいるのはエヴァンジェだ

彼らは武器を持たず

ACにも乗っていない

ACは、ゲートの外に全て置いてある

隊長クラスの貫禄だろうか

アレスとエヴァンジェ以外の私語は

その場の空気が絶対に許さない

ビリビリした殺気が

肌を刺す

気が弱い人間は、肝が潰れる思いだ

つまり、一番緊張しているのはルナだ

「今、話したとうりだ」

冷静に答える

アレスの隣に、ルナが

そして、ACパイロット達が銃を向けている

緊張が、絶えず心臓にのしかかる

戦場でも、ここまでプレッシャーはかからない

なれない銃を一生懸命にルナは支える

むろん、この中で銃を扱えるのは

アレスとエヴァンジェと他数人だろう
しかし、アレスは銃を持っていない

「信じろと云うのか？」

睨みつける

「信じなくとも、我々はもう、戻らない」

あらゆる行動が、2人の背中と目つきで黙殺される

「なぜだ？ 貴様らには守るものが無いとでも言うのか？」
あきれたように聞いた

エヴァンジェは、冷静に答える

「我々が忠誠を誓ったのは国だ。クラインではない
そして、守るべきは民だ」

アレスは、胸に秘めているもの吐き出すかのように
静かに怒りをのせながら問う

「なぜ、こちらで民が救える？」

しばらくの間

静かな時間が流れた

アレスとエヴァンジェ以外の人間には

今すぐにでも殺し合いが始まるかのような殺気が
広がる

下手に動けば

銃を持ったA Cパイロット達は引き金を引いてしまいそうだ

少し、ためらうかのように

エヴァンジェは云った

「生体兵器が、何を元にして作られているか知っているか？」

くファイヤーバイオウエポン（前編）く#9 空中要塞襲撃

「奴ら・・・一体何を考えている・・・？」

机に向かつて

クラインは文句を云う

その後ろは、壁一面がガラスになっており

首都を一望できる

先日クラインにある報告が入る

それは、エネミーバスターの8割がアーカイクに下り

それを、アーカイクが受け入れたのだった

戦争において

ACは主戦力となり

勝敗を左右するのは明白だ

その切り札をクラインは失った

残っているのは、金で雇った無名のACばかりだ

「・・・」

クラインは

机にある機密回線電話を手にとった

「・・・・・・・・私だ、至急＜BW3301＞の機動テストを開始しろ・・・・・・・・」

・・・・・・・・わかってる。もちろんそれが確定してからだしかし、急げ

あれが、我々シュクリンドにとって最後の希望だ

ゆえに、GCの使用も許可する」

広いガラスの向こうを見つめ

クラインは笑った

「私もそちらへ向かう
サンプルの用意を・・・低調に扱えよ？」

彼女は、私のモノだ・・・」
受話器を置き

はるか彼方の空を見る

「フフフフ・・・ハハハハッ・・・アッハハハハハハハハハハ！
！！！！」

「レイヴン、こちらもアーカイブにつくのが賢明かと」
何をいいだしたのやら

ガレージに来て第一声がそれだ

「シフ・・・俺達はあるまで中立だ」

「しかし！アーカイブにほぼ全てのランカーACが集結しています。
その状態でアーカイブを敵に回すのは自殺行為です」

シフは、少々計算派の人間だ

自分達の利益になるよう

いつも動いてくれる

しかし、今回はこちらも退けない

「守るものがあるからここに居る

中立には中立にしかできないことだってある」

「わざわざ中立で居なくても、できることはたくさんあります!!」
すると、スサノンが割り込んでくる

「まーまー、別にいいじゃねーか？」

シフににらまれ、スサノンは後ずさりする

眼鏡の奥の瞳が「黙れ」と脅迫している

すると、天からの救いなのかメールが届く

運のいいことにアーカイプの依頼だ

「今回は、とりあえずこの依頼を・・・」

「・・・・・・・・わかりました・・・・・・・・」

内容は、数機のACでシュクリンドの空中要塞<レッド・カーペツト>を

襲撃するというものだ

そのACリストには

アレスとエヴァンジェの名もある

今までレッド・カーペツトが、それほど活躍を見せたわけでもない
それでも、今回大規模な襲撃作戦が実行されるのは

エヴァンジェたちが、この要塞に何かよからぬものを感じるからだ
ろう

装備で見れば

街一つは確実に焼き払える代物だ

「作戦領域に入ります・・・」

「シフ・・・まだ怒ってるのか？」

「別に怒ってないと思います・・・レイヴン、これが終わったらきつちり話をつけますよ」

なにやら家出したい気分だ

運搬用飛行艇に乗り、目標を目指す

程なくして、レッド・カーペットが見えた
しかし、予想しなかった事態が起こった

レッド・カーペットの全ての装備が機動していた

ACを乗せた飛行艇めがけ砲撃してくる
5機のうちの1機が墜落した

「このまま目標に接近します」

飛行艇はレッド・カーペットのデッキに着陸した
8機のACが降りる

「本機は作戦領域より離脱し・・・うわあああああ！！！！・・・」

乗ってきた飛行艇が撃ち落される

「レイヴン！貴様は右翼のエンジンルームへ行け！！」

レッド・カーペットに潜入してまもなくエヴァンジェがそう支持する

レッド・カーペットのは3つのコントロールルーム

4つのエンジンルームに

中央に動力システムがあるらしい

結局総勢40機のACが、無事潜入できたのはわずか21機になってしまった

右翼へのルートは単純なものだ

しかし、問題なのは壁を壊さずに進むこと

設置型のガードシステムが一気にレーザーを浴びせてくる一つ、また一つと確実に破壊していく

右翼のエンジンルームは右翼の先端に行き

その通路を下へ進んだ後の本体にある

つまり「<字」に進むことになる

ゲートを通ると

一機のACが立ちはだかった

「ここから先には通さない」

それはランカーACではない

が、異様な色のその機体は良く知っている

トイBOXという名のACだ
腕、脚、頭、コア

全ての色がバラバラの機体だ

右へ跳ねるように回避する

今まさに自分が居た場所にスナイパーの弾が
線を描いて飛んできた

トイBOXは後退しながら
撃ってくる

距離をとるつもりだろう

こちらは、マシンガンだ
離れすぎると当たらない

右へ左へ避けながら
距離を縮める

するとトイBOXが前進してきた
威力の低いブレードに斬りつけられた
ダメージはそれほど高くは無い
斬られたというより押された
そのせいで距離が開いてしまう

だが、この間合いならマシンガンは当たる
が、弾は壁に直撃する

トイBOXは上に跳ねた

上からミサイルが10発飛んでくる
ほとんどは壁に当たったが

それでも4発のミサイルが着弾した

「おらおら！腕が火ふいてるぞ？

そんなんで、狙いが定まるのか？」

もともとマシンガンで狙いなど定めてはいない
むしろ散ってくれたほうがありがたい

しかし、

ミサイルに当たったため後退し
壁に追い詰められた

「死ね！」

オーバードブーストで突っ込んでくる
とっさに左へ避ける

トイBOXは壁を斬る

すると今までのダメージ（主にマシンガンとミサイル）で壊れかけていた

壁が破壊された

上空を高速で進む要塞に穴が開き
気圧が一気に下がる

穴から大量の空気が流れ出ていく
その力に巻き込まれ

トイBOXは壁に張り付け状態になった

「ま・・・まってくれ!!」

聞かず

ブレードで引き裂いた

「!!・・・」

パイロットは蒸発し

機体はそのまま壁と一体化した

エンジンルームを破壊すると
通信が入る

「作戦は成功だ・・・帰還する」

全てのACが離脱すると

レッド・カーペットはアーデンリバーに落ちた

轟音と砂煙と水しぶきを上げた

「レイヴン、お疲れ様・・・さあ、話の続きをしましょうか
？」

ゝファイヤーバiaoウエポン（前編）ゝ#9空中要塞襲撃（後書き）

今回のACトイBOXは知人の機体でした

そしてパイロットも若干本人を意識しました

なのでちょっとコツケイな最期にしてみました

ごめんなさいm（m

くファイヤーバイオウエポン（後編）く#10 調査隊救助

差出人 アーカイク調査団

先日実行されたくレッド・カーペット＞襲撃作戦において
参戦されたこと、感謝いたします

実は、あの時動力システムを破壊しにいったACが帰還しておらず
消息を絶っていました

そこで調査団を派遣したところ

調査団とも連絡がつかなくなりました

ついさきほど、最後の通信があり

どうやら動力部に巨大生体兵器が存在しているようです

ほかのACは間が悪く、全て出払っています

そこでレイヴン、あなたに消息を絶った調査団の救助と

未確認生体兵器の排除をお願いします

「急がないとな・・・」

メールをチェックすると

すぐに支度を始める

「おう！準備はできてるぜ？」

スサノンはパイロットスーツを取り出した

今回行くのは動力部だ

相当の熱が放出されているだろう

くレッド・カーペット＞は墜落したが

まだ、動いているのだ

「っで・・・どこからはいる？」

アーデンリバーに墜落した巨大要塞は
半分が地中に埋まっている

「前回進入した通路が使えるようです」

なんどか要塞の出っ張りに乗りながら
デッキを指す

<レッド・カーペット>は真っ直ぐ下に落ちたため
地面と平行にある

ゲートは崩壊していた
中に入ると

そこは、あまり変わっていない
しかし明かりはついていていた

生体兵器と調査隊は動力部にいるだろう
今はそこを指す

前回とは違ったルートに行く

案外、簡単に進んだ

どうやら、防衛機能は死んでいるようだ

薄暗い通路ほど怖いものはない

どうせなら、盛大にMTがわいてくれている方がありがたい

突き当たりのゲートに

危なげなマークが描いてある

ここが動力部だ

慎重に中に入った

突然、生体兵器が襲ってくるかもしれない

しかし、中に入ると

そこにはACの残骸と

燃え上がる動力エンジンしかなかった

「レイ・・・ヴン・・・レイヴン！！助けてくれ！！！」
振り返ると

ゲートの隣に

防熱テントが張ってある

どうやら、調査機が壊れ

ゲートを開けなくなったようだ

「ここに、生体兵器がないか？」

「いや・・・<ここ>には何もない」

通信機もイカれているようだ
この近距離でも聞きづらい

突然、後ろの炎が燃え上がる
そこには、巨大なミミズが口を持ったような
姿の炎が浮かび上がった

その炎は、こちらを睨みつける

「こいつが・・・生体兵器か・・・？」

明るいオレンジ色の炎は

こちらを見続けている

「馬鹿な・・・コイツ、さっきは別のエンジンルームにいたのに！
！！」

どうやら、＜レッド・カーペット＞の動力源はコイツのようだ
むしろ、＜レッド・カーペット＞自体がこの生体兵器なのかもしれない

それなら、前回乗り込む時に全ての装備が開いていた理由に
なるかもしれない

炎の生体兵器は、いきなり襲い掛かってきた

巨大な口をあけて

突っ込んでくる

それを、右へ避けた

しかし、避け切れなかった

機体が、炎に飲み込まれる

それ自体はダメージにならなかった

問題なのは、それにより機体温度が上昇したことだ

電気というのは、熱が上がるとよく流れる

それにより、機体にジュネレーターから余分な電気が流れ
各部位を損傷させる

温度危険域到達の警告音が
うるさい

マシンガンを撃つが

効果はない

コイツ自体は火だ

ブレードで斬っても効果がない

こんなものが一体どういう原理で動いているのか
わからない

生体センサーを取り付けたため

ミサイルのロックはでいるはずだ

しかし、それも叶わなかった

ヤミクモにマシンガンを撃った

すると、溶鉱炉に弾がはいる

炎の生体兵器が一瞬消えた

こいつの本体は溶鉱炉の中だ

機体温度が高まり

武器が使えなくなる前にこいつを倒す必要がある

溶鉱炉にレーザー砲を打ち込んだ

炎は消えた

しかし、溶鉱炉が緑色に輝いている

溶鉱炉の中にはカプセルがあった

カプセルの中には緑に輝く玉が入っていた

カプセルには＜BW3311＞と記されている

これが核のようだ

マシンガンで破壊すると

白い輪が広がり

緑の玉は崩壊した

外にでると

＜レッド・カーペット＞は少しずつ
崩壊している

アーデンリバーに赤い鉄片が流れていく

「ラスト・フル・ミッション」#11巨地上戦艦進行阻止

差出人 アーカイブ自衛軍

緊急事態です

先日、偵察部隊の情報によると

シュクリンドの巨地上戦艦＜メテオ・フィスト＞が

アーカイブ領に進入したとのことです

他のAC部隊はすでにシュクリンド本土へ進行してしまいい間に合いません

至急レイヴンの応援を要請します

「最近は、なにやらアーカイブの依頼がほとんどだな・・・」
朝食をとりながら返事のメールをうつ

「シュクリンドのほとんどの通信施設は破壊されています
依頼が出したくてもだせないでしょう・・・」

「作戦領域に入ります」

上空からハンガーが放される

巨大地上戦艦は目の前だ

しかし、巨大地上戦艦のとなりを

4機のACが進んでいた

「ん？・・・正面に未確認のACを確認・・・排除する」

敵のACはこちらに向かってきた

ライフルが赤い光を放ちながら飛んできた

後退しながらミサイルを撃つ

4機のACは散らばり

4方から囲むような陣形を取った

囲ませはしない

マシンガンを浴びせながら突っ込む

一番前のACに狙いを定める

地上戦艦から

高火力のエネルギー砲が飛んできた

当たることなく避けたが

タイミングを外された

狙っていたACは後退する

左からミサイルが何発もとんでくる

前後に移動しながら

全て避ける

今度は地上戦艦から無数のミサイルが飛んでくる
前からはライフル弾が飛んでくる

地面を滑りながら前進する

ミサイルが地面に次々とおちる

間合いに入りACにマシンガンをうつ

ACはその弾を浴びながらも

右後ろへ飛んだ

それを追いかけて

ブレードで斬る

決定打には及ばず

そのまま、さらに真横へ飛んだ
追わず

地上戦艦へ狙いを定める

まずは、厄介なグレネード砲だ

ブレードを何回か連続で使って

破壊する

敵のさつきとは別のACが2機追いついてくる

かまわず、背中のミサイルを破壊に回す

ACがエネルギーマシンガンを撃ってくる

方向を変え

後退して背中に飛び乗り

レーザー砲を構えた

3発のレーザーがACを捕らえた

ACは転がりながら地面を進み

戦艦に衝突して、爆散した

ミサイルをブレードで破壊し

側面のマシンガンを破壊する

残るは、エネルギー砲だ

残ったAC3機が背中に上がってきた

ライフルを撃つACは、すでに大破寸前だ

狭い背中を飛ぶように前進する

マシンガンを撃たれるが

気にせず突っ込む

瞬間的に右へ移動する

案の定、そこへACが切りかかってくる

飛び込んできたACの後ろを斬る

ACは数十メートルある戦艦の頂点から落ち
爆発した

のこるは2機

すでに大破寸前のACをマシンガンでうつ

満足に動けず

その場で爆発した

「貴様・・・何者だ」

残ったACはリーダーのようだ

ライフルを絶えず撃ってくる

戦艦から飛び降りる

敵ACは追いかけてくる

「・・・？・・・どこだ？」

降りた場所には何もいない

一気に斬りかかる

戦艦の後ろから飛び出してきたACに気づいたが
時すでに遅く

ACは側面を斬られる

「貴様・・・レイヴンか・・・」

云いながらACは、ヨロヨロと後退しながら爆散した

残るは巨大地上戦艦のみだ

ブレードで死角から何回も斬る

そのうち

戦艦のいたるところから煙が上がる

崩壊しながら進み

やがて大きな爆発が起こり

巨大戦艦は散った

「目標の撃破を確認
レイヴン、お疲れ様」

くラスト・フル・ミッションく#11巨地上戦艦進行阻止（後書き）

次回から、物語はクライマックスへ突入します
乞うご期待

感想待っています

プロテクトアーマー＼＼#12首都強襲

「ついにアーカイクがシュクリンド本土へ攻撃を開始するようです」
シフは依頼メールを確認すると

こちらへ、手渡した

「その言い方からすると、オレにも参戦しろってことか？」

「はい」

差出人 アーカイク本軍

先日、我々はシュクリンド前線基地を制圧し
本土への進行を開始しました

シュクリンドの首都、ルーンクルスには何万人という一般人が在住
しており

このまま攻撃を開始すれば、多くの命を奪いかねません

そこで我々は首都全域に攻撃宣告を出しました

内容は、3日後に攻撃を開始するというものです

故に、敵勢力が拡大することは間違いありません

そこで、今作戦は

首都をいくつかのエリアに分担し

そのエリアに各3体のACを配置することになります

そこでレイヴン、アナタにも本作戦に参加していただきたい

報酬は破壊した量に応じて支払います

この作戦が成功すれば、この戦争が終ることは間違いありません
どうか、よい返事が返ってくることを願っています

「これで終る・・・か」

「依頼がへっちゃまうなあ」

スサノンが云う

確かに

戦争が終れば依頼は無に等しくなるだろう
しかし

終らせなければ、幾多もの命が消えてしまう

人というのはなぜか

失って初めてその大切さに気づくのだ

「ここで最後の稼ぎだな」

「広いな・・・」

すでに作戦は実行されており
いくつかのビルは壊れている

作戦領域に入った

そこに居たのは3機のACだった
味方はすでに大破している

「レイヴンか？」

運が悪かったな

我々と出会ってしまったからには、生きて帰れると思うなよ！レイヴン！！！！」

3機が同時に突っ込んでくる

一機は軽量型スナイパー装備の2脚灰色AC

一機は重量型バズーカ装備2脚黒色AC

一機は中級型マシンガン装備4脚赤色AC

ベストバランスの組み合わせだ

灰色の機体が誘導をかけてくる

ユラユラと揺れるように飛びながら

強力な一撃を誇るスナイパー弾を撃ってくる

黒い機体がビルに隠れながらバズーカを撃ってくる

着弾しなくても近くのビルに当たり

鉄骨などが落ちてくる

黒い機体に狙いをつける

重量級のくせによく動くその機体を

追いかける

「ちっ！！あっちいけ！！」

がむしゃらに撃ってくるその弾を

左右に避けながら接近する

右足にスナイパー弾が当たった
方向を変え

ビルの隙間に逃げ込もうとした
その時

曲がったビルのカドに4脚ACが構えていた

無数のマシンガンの弾を近距離でまともに受け
吹き飛ばされる

ビルにぶつかり

ガラスが滝のように降ってくる

ガラスの滝の内側で黒いACを見つけた
オーバードブーストで
滝から飛び出した

「!!!!」

ブレードでコアを斬りつけた
そのまま後退し
マシンガンを浴びせる

機体はヒザを付き、爆発した

「貴様!!!! ゆるさんぞ!!!!」

怒りに燃えたこのように
灰色の機体がビルの上から落ちながらスナイパーライフルを撃って
きた
雹のように降ってくる

レーザー砲の狙いを定め撃つ

スナイパー弾を弾きながら
コアを貫いた

「ぐああああああ・・・・・・」

空中で爆発し

破片がコツコツと機体に当たる

周りを見ると4脚ACが見当たらない

突然、後ろのビルの死角から

レーザーキャノンをチャージして飛び出してきた
反応しきれず

放たれたレーザーはマシンガンを焼損させた

2度とチャージはさせない

ブリストを全開にして孤を描くように突進する

マシンガンを撃ってくる

着弾するのを気にも留めず
接近して斬る

静かなビル街に爆発する轟音が響き渡り
周辺のガラスにヒビが入った

「レイヴン！！敵AC2機の増援を確認！！！！」

振り向くと

大路地から2機の軽量型のACが走ってくる

「なんだ？私達が来る前にやられるとは……」

「しかし、あの3人を短時間で撃破できたことはほめてやろう」

2機のACは別々に分かれた

「さあ……もういいだろう？」

「死ね！！」

1体のACが後ろから現れた

ライフルを正確に撃ってくる

壊れかけたビルの中に逃げ込む

武器を一つ失い

これ以上の戦闘は不可能だ

「逃がさんぞ！」

有言実行するかのように追い込んでくる

広い路地を逃げるので精一杯だ

すると、あるビルの一室に逃げ損ねた人が集まっていた

「おい、一般人がのこってるぞ」

「気にすることもないだろう・・・報酬さえもらえればいい」

急にルナの言葉が耳に響いた
いま自分が逃げ続けられ

奴らは確実にこの市民を巻き込んででも
オレを撃破しようとするだろう

目の色が変わり
レバーを持つ手に力が入る

方向転換をし

近いほうのACに狙いを定める

レーザー砲を突っ込みながら撃ち続ける

「馬鹿な！！2脚ACが動きながらそんなもの撃てるはずが・・・」

巨大な青白いレーザーが
機体にいくつも当たる

「きゃあああああああああ！・・・」

地上に落とすことなく
空中で爆散させる

「ぐっ」

残る一体がライフルを撃つ
機体に着弾する

しかし

機体からは粉が出た

「・・・!! コジマ粒子か!!」

鋼鉄のような粒子が

実弾の威力を無に変える

接近し

何回も

切り裂く

「まさか・・・こんな奴が・・・」

機体はバラバラになり爆発した

「タイムオーバー作戦時間終了です

レイヴン、帰還してください」

「ふははははははは」

薄暗い倉庫で

クラインは怪しげに笑った

「ついに・・・ついに、復活のときがきた・・・否・・・」
振り返り

愛しいものを抱くように、腕を広げた

「誕生だ・・・!!」

「プロテクトアーマー」#12首都強襲（後書き）

感想宜しくお願いしますm
〔
m

ルナ＼＼＼#13 人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除

「いつてくる」

アレスは2機がかりでなければ開けられないゲートを通った
それと同時にゲートが閉まる

ルナは、アレスを見送ると

元来た道を引き返す

ゲートが開く

そこには、エヴァンジェが立っていた

「どこへ行く？なぜ貴様がここにいる？」

「おまえには関係ない・・・私は帰る・・・」

ルナはエヴァンジェの隣を通り過ぎた

エヴァンジェは、部屋に入りゲートへ近づいた
しかし、ゲートは開かなかった

「コア破損、頭損傷、武器破損、腕破損・・・久々にやられまくったなあ・・・」

スサノンは新しいパーツをつけるために外したパーツを見て云った
ここ最近、異常な戦闘能力をほこる生体兵器と戦っていたが
やはり、最終的に恐ろしいのは人間ということだ

「新しいコアを注文しといたから、宜しくな」

「レイヴン、非常事態です」

シフが、慌しく入ってきた

「これを」

差し出されたのは新聞だ

クライン存続!!？

先日、アーカイプ軍ロベラーズ・ガーディアンによって

シクリンドへの総攻撃が実行され

アーカイプは勝利し、事実上シクリンドは滅亡した。

しかし、その後の衛星調査により

シクリンド首都に地下通路が発見された

その通路の先は、シクリンド最東端の人工島につながっていると
判明

さらに、その人工島を詳しく調査した結果

そこには人工生命体研究施設が存在しているコトがわかった

人工衛星<カリキュラム>は、この施設の中心部に存在する

超巨大生体兵器を撮影することに成功した。

写真には、施設の中心部にぼやけた黒い影がうつっている

しかし、そこにははっきりと<BW3301>と書かれている

「これは・・・」

「すでにアーカイブは動き出しています
そして、レイヴンにも依頼が・・・」

BW3301ということは

一番最初に作られた生体兵器なのだろう
なぜか、嫌な予感がする

「スサノン、いつ整備は終る？」

「あと、3時間だな」

首都の地下には何も無かった

薄暗く、水銀灯がぼんやりと光っている

長い通路を抜けると

そこは人工島の樹海の中だった

目の前に施設へのゲートがあった

施設内は、うっとうしい生体兵器がウジャウジャいた
避けてとおりながら

中心部へ通じる部屋へ入った

「やはり来たか・・・レイヴン・・・」

そこにいたのは、意外にもACだった

黄色い機体・・・ルナだ

「おまえは、私がここで討つ！」

云うと、ルナはライフルを連発してきた

右へ飛び

弾を避ける

「さて！なぜお前がオレと戦う！！？」

「おまえを討つのは私だ！！！！！！！！」

答になっていない

なぜルナが敵対しているのか、わけがわからない

マシンガンで誘導をかけ、壁のカドに追い込む

そこへ、ミサイルを撃った

数発のミサイルが機体に着弾する

「ちっ・・・」

「お前は・・・お前だけは・・・」

ルナは無茶にも真正面を突っ切って

斬りかかってくる

軽く避け

背中にマシンガンを浴びせる

「おちつけ！なぜ、お前がここにいる？どうしてお前がオレに立ち向かうんだ！！？」

「うるさい!! レイヴン如きがしゃべるな!!!」

お前はアレスの・・・アーカイプの敵になるかもしれない存在だ！
ここで敵を討って何が悪い!!!?」

「戦争はすでに終わっている

もう戦う意味は・・・」

「だまれ!!」

レイヴンなど信じられるものか!!!!!!

中立だといって

どっちも護るとか云って

結局どちらも傷つける・・・」

ルナはライフルを撃つのをやめない

ムチャクチャに撃たれる弾は

一つもあたららない

「お前が・・・お前が云ったんだ

全てを護るって・・・それで、お前が一体何を護ったんだ!!!!!!
?」

もはや自分を見失っている

「オレは護ったさ

オレの全てを・・・

あの約束を・・・

それが全てだ

それが・・・オレの存在理由だ」
レゾンデートル

「え?」

一瞬動きが止まった

そこへブレードで斬りつけるように押した
機体は激しく壁にぶつかった

「くそっ・・・!!」

それでもルナは反撃してきた

マシンガンで突っ込んでくる機体を撃つ

「うわあああああ!!」

転がるように機体は地面を滑った

バランスシステムが発動し

機体は起き上がった

しかし、もはや機動することはない

「なぜ、お前が立ち向かってきたかはわからない
しかし、オレは護りきったはずだ

オレが交わしたあの約束を・・・

その結果がこの先にある

そこで待ってろ」

ゲートを開き

奥へと進んだ

「レイヴン・・・か・・・」

「わからない・・・」

「おまえたち・・・・・・・・・・が・・・・・・・・・・」

目の前が真っ暗になる

そして、二度と光を見ることはない

「ルナ」#13 人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除（後書き）

感想宜しくお願いします

くパトリオットく#14人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除(前)

正直今回はR15指定ギリギリのような気がします
蜘蛛嫌いの人は

あまり想像しないようにお願いします

くパトリオットく#14人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除

細い廊下の先に

怪しげなゲートがあった

そこはエレベーターだ

エレベーターを降りるとそこは
また細長い廊下であった

そして、黄色いラインの入ったゲートを開く

「誰だ」

そこにはエヴァンジェがいた

「なぜレイヴンがここに居る？」

聞きながらエヴァンジェは臨戦態勢に入っていた

「それを云うなら・・・なぜお前がここにいるんだ？」

「ふっ・・・おそらく貴様と同じだろう」

この先にいるBW3301の排除だ」

そこには赤いランプが点等するゲートがあった

「このゲートは2機のACで開く

しかし、さきに進めるのは一揆だけだ

レイヴン、俺とお前

どっちがこの先に進むにふさわしいか
ここで決着をつけるぞ」

「そうか・・・退く気は無いんだな・・・オレはどうしてもここを通らないといけないんだな」

「我々が忠誠を誓った国の後始末だ・・・」

2機のACが同時に動き出した

「悪いが、ここは通してもらおうぞ！レイヴン！！！」

地面スレスレを高速で飛びながらマシンガン撃つ
一歩遅れてエヴァンジェの機体のすぐ隣を駆け抜けていく

エヴァンジェが急に前へ飛び
リニアライフルを撃ってくる

同じように前に移動し
頭上を弾が飛んでいく

そして、お互いが斬る

お互いのレーザーブレードがぶつかり合い
そのエネルギーが爆発する

2機のACは壁の前まで吹き飛ばされる

目の前にいるACをロックオンした

数発のミサイルが真っ直ぐエヴァンジェに向かって飛んでいく

エヴァンジェがオーバードブーストを発動した

時速300キロを超えるスピードで突っ込んでくる
ミサイルは無残にも壁に着弾した

「おわりだ」

青白いブレードが光った

高速の刃が光り輝いた

光の刃は空を切る

クイックブーストでエヴァンジェの側面をとった
アイカメラの赤い光が怪しく線を引いている

マシンガンを浴びせながら
後退する

ACの左腕は損傷した

「ちっ」

同じくエヴァンジェも後退する

しかし

クイックブーストで再び距離を縮めた

残像が消える前に
レーザーブレードがコアを斬った

「・・・！」

勝敗は決した

突然上の金網が落ちてきた

そこには憎悪がわく光景があった

蜘蛛のような生体兵器

BW3309が何体も現れたのだ

天井から壁を伝って
降りてくる

「早く・・・ゲートに・・・」

エヴァンジェは可能ながぎり全速でゲートに向かった

2機のACが近づくと
ゲートは開いた

「行け！レイヴン！！」

「しかし・・・」

「貴様・・・俺がこいつら如きにやられるとでも思っているのか？」
「・・・いいや」

素晴らしい残し

ゲートに向かって走った

ゲートを抜けると

だんだん閉まっていく

「・・・・・・・・」

数体のBW3309が

少し高いところから落ちてきた

エヴァンジェはソレを回避し

リニアライフルで貫いた

別の個体が腕をかすめた

目の前に落ちた個体を

すばやくブレードで処理する

上かわ出てくる集団に狙いをつけ

いくつもの小型ミサイルを撃ち込んだ

おびただしい量の体液と

いくつもの爆発が起こる

蜘蛛の死骸が落ちてくる

しかし、生き残ったBW3309が一斉に飛び掛ってきた
目の前の数体を撃ち殺し
回避通路を確保した

さっきミサイルを撃った場所に
蜘蛛が降り注ぎ
波のように見える

部屋に侵入した全てのBW3309がエヴァンジェを見た
リニアライフルを可能なかぎり連射する

その一発一発は確実に即死へ追いやっている
しかし、数が減っている気がしない

ついに、蜘蛛がエヴァンジェにしがみついた
そして、鋭い顎で
鋼鉄の機体を食いちぎる

「ぐああああ!!!」
差し込まれた顎が背中に突き刺さった
それを、決るように引き抜く

開けたコックピットから
BW3309の5つの全ての目と
目線があった

勢いをつけ

蜘蛛はエヴァンジェに喰いついた

薄暗い通路の先は弾薬庫だった

一旦機体を降り

弾薬を補給した

その倉庫の向こうには

またゲートがあった

〈ミコト〉#15 人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除

サビた音がしながらゲートは開いた

部屋の中にたまっていたのだろう

埃の風が、吹き抜けてきた

そこには、1機のACと1機のMTが居た

「レイヴン!!?」

MTに乗っているのはクラインのようだ

アレスがこちらを向いた

「なぜ、貴様がここにいる?」

冷静に聞いてくる

「ここにある、生体兵器を潰しにきた」

すると、クラインは叫ぶように云った

「なに・・・エレナを!!?」

その名を聞いた時

手に嫌な汗が溜まる感覚がした

「エレナ?

どういうことだ」

クラインに近づこうとした時

アレスが間に割り込んだ

「先に行け」

「わ・・・わかった・・・」

クラインはゲートの向こうへ消えた

その時、ゲートの向こうには

巨大な影がうごめいていた

「なぜ・・・お前がクラインをかばう？」

少し間を置いて

アレスは銃口をこちらに向けて云った

「いままで・・・お前が戦ってきた生体兵器、
不自然だとおもわないか？」

行く先々でまったく別の個体と遭遇するのは・・・」

確かにそうだ

大量生産されていたはずのBW3309ですら
さっき出てきたので2回目だ

「アレを手配したのは俺だ」

意外だった

「なぜだ・・・クラインはお前の敵だろう？」

「お前は自分の国に忠誠を誓ってるんじゃないのか？」

「俺が忠誠を誓ったのは、全ての命だ
その命を護るために」

「俺はここにいます」

意味がわからない

それ以前に

アレスがクラインと接触していたなどという
情報はまったくなくなっていない

「生体兵器が何で作られているか知っているか？」

「人・・・か？」

「違うな・・・死体だ
あらゆる生物の死体だ」

云々とアレスは
後ろのゲートに少し傾いた

「あの向こうにある＜BW3301＞
あれが最強の生体兵器だ
あれは、最も生体兵器に近かった人間の死体を使っている
その名はエレナだ」

「・・・」

静かに怒りが込み上げてくる

「なぜ・・・クラインと手を組んで

お前が忠誠を誓った＜命＞を救えるんだ？」

「・・・」

人は愚かだ」

アレスは再びこちらと対峙した

「人^{こらしあひ}どうして戦争をして
何になる？」

それがわかっていながら、何故、同じ事を繰り返す？

俺は、気づいた・・・戦争はなくならないと
その度に、罪の無い命が犠牲になると・・・

なら、どうすればいい？

結論は簡単だった

人が殺しあわなければいい
生体兵器に殺し合いをさせればいい

そうすれば、誰も死なない」

「おまえは、そのために死んだ命を使うのか？」

「死んでしまえば全て同じだ
もう、後戻りはできない・・・」

アレスが、臨戦態勢に入った

「お前が、俺の意見に賛同する必要はない
人は、その数だけ信じる未来がある

しかし・・・・・・・・邪魔をするなら・・・・・・・・消す！」

右に、高速で移動し

レーザーライフルを撃った

反応が遅れ

左肩をかすめた

エンブレムが滲む

「ここで消えろ！レイヴン！！」

こいつは、こいつなりに

この世の未来を案じたのだろう

しかし、だからと云って

このまま生体兵器を作らせるわけにはいかない！

この、先に待っているのは

死んだ、否、死なせてしまったエレナだ！！

目の色が変わり

レバーを持つ手に力が入る

オーバードブーストで距離を縮める

近距離から

弾速の早いマシンガンを撃つ

いくつかは着弾したが
避けられた

逃げ道を塞ぐかのように
レーザーライフルが撃たれる

その全てをギリギリで避け
斬りかかる

その瞬間

アレスの機体が信じられない動きで後退した

「お前・・・!!」

「そうだ・・・俺も貴様と同じ改造人間だ!!!!」
イレギュラー

アレスは、レーザーライフルを確実に
一撃の箇所を狙ってくる

アレスがオーバーボードブーストで距離を縮めた

信じられないことに

5回も連続で斬りかかってきた

全てを避けられず
腕をかすれた

後退したが
そのすぐ後ろは壁だった

ドーム状の部屋の上空に舞い上がり
信じられない標的確認仕様でロックオンされ
無数のミサイルが撃たれた

壁スレスレを右に走る

ミサイルは機体のすぐ隣で壁に着弾する

クイックブーストで左前に前進し

真下を通りながらマシンガンを撃つ

後ろを捉えた

しかし、アレスはオーバードブーストで迂回しながら旋回した

レーザーライフルが再び機体を壁に追い込もうとする

このままでは、BW3301と戦闘になる前に弾が尽きる
それどころか、アレスにすら勝てない

「終わりだ・・・！」

アレスがブレードを展開して突っ込んでくる

なぜか、アレスの動きが遅く見える

クイックブーストで、補正がきかない距離で側面を取る

「!?!?」

さらにクイックブーストで後ろに回る

ブレードで斬る

機体がドーム状の天井を支える柱の角に吹き飛んだ

小回りがきかない今がチャンスだ

レーザーキャノンを後退しながら撃つ

赤い機体に着弾する

腕に、武器に、肩に、コアに、足に、頭に・・・

青白い爆発が、赤い機体に巻き起こる

「貴様・・・」

冷却機能が壊れた

無理に使ったブースターのツケが一気に襲い掛かる

機体熱量が急激に上昇した

「レイ・・・ヴン・・・!!!!!!」

機体は自己破壊を初め
爆散した

振り返り
ゲートに向かう

ミコト #15 人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除（後書き）

ついに今回は最終怨敵との戦闘です

ラストボス

次回 #16 とエピソードで、物語は完結します。

感想、宜しくお願いします m () m

くエレナく#16 人工生命体研究施設破壊及び巨大最終生体兵器排除

蠢く影は、いくつもの触手を
絶えず動かしている

クラインが生身で

その影を見つめていた

「美しい・・・そう思わないか？レイヴン・・・」

振り返ったクラインは笑っていた

「彼女を知った時・・・私がどんな思いだったかわかるかね？」

「・・・」

「感動だよ！レイヴン！！感動したんだ・・・！
こんなにもすばらしい女性がいるとは・・・」

「一つ聞きたい・・・彼女の死体をいつ持ち出した？」

「かなり前だ・・・そう・・・謎のアーマード・コアが
研究所を襲撃した事件を知っているかね？」

あのアーマード・コアのパイロットが
ロマンチックにも、海岸に彼女の死体を埋めたんだ・・・」

雲に隠れていた月が顔をだす

その時、クラインの顔が見えた

その顔を見たとき

絶句した・・・

あの科学者だ

エレナを死に追いやった張本人だ

クライン？

違う

コイツの本名は

アルヴァスタンⅡドッドⅡスネーク

あの時、倒したはずのスネークだ！！
全ての意図が繋がった

アレスと内通していたのは
スネークという人物だろう

そして、声高に演説などをしていたのは
クリス・クライン

どちらも同一人物だ

そして
恐らくエヴァンジェはその事に気づいた
だからこそ、こいつから離れたのだ

しかし、誤算だったのはクラインがアレスと内通していた事実をし
らなかったことだ

「スネーク・・・」

「その名を呼ぶかね？」

なるほど……おまえがあのＡＣのパイロットか！！！？？？」

スネークは叫ぶように笑った

[illegible]

天井が崩れているにもかかわらず

その声は響いた

「そうか．．．君か．．．そうかそうか．．．なら、礼を言わねばな．．．」

?

「彼女を見つけてくれてありがとう」

スネークは深くお辞儀をした

[illegible]

これまででない怒りが、憎しみが
地獄の底から込み上げてくる

「さあ！！フィナーレだ！！！！！！」

そう叫んだ瞬間

巨大な影の触手が

スネークをつかんだ

「！！？」

そのままスネークを

口の中に放り込んだ

「何をする???？」

口の中に別の触手があつた

その触手が、スネークを捕らえる

「やめろ・・・やめろおおおおお！！！！！！！！」

そのまま、スネークは影に取り込まれた

ゆっくりと、影が
進んでくる

月明かりに照らされたその姿は憎悪の塊だ

額には＜BW3301＞と表記され
その文字の隣に

いくつもの武器が埋め込まれている

触手には、鋭い爪がついている

すると文字の真ん中の<3>のところが

妙に振れだした

そこには

皮を剥がされたような人が

伸びてきた

「レイ……ヴン……」

「誰だ？」

「レイヴ……ン……私だ……もう……忘れたのか？」

その声はまるで機械で作られたような音だった
しかし、それが誰なのかは、ハッキリしている

スネークだ

恐らく

この生体兵器と融合したのだろう

「ちょうどいい……一緒に葬ってやる……!!」

エレナの死体を元にしたとはいえ

それはエレナではない

ならせめて、もう一度、あの世に送ってやることが

せめてもの償いであり、救いだ

無数の触手が襲い掛かってきた
マシンガンで触手を撃ち落しながら
左へ飛ぶ

額の無数の武器が
レーザーを撃ってくる

避けきれない
しかし、その一発の威力は小さい
が、雨のように撃たれるレーザーは侮れない

ミサイルが額の武器をロックする
撃たれるミサイルが額に命中した

「「ぐあああああ！！！！」」

スネークにもダメージがあるらしい
その悲痛の叫びに気を取られ
触手が機体を裂いた

右腕が損傷した

後ろへ飛び

レーザー砲で向かってくる触手を撃つ

18本あった触手が

あと1本だ

しかし、レーザー砲の所持電力チャージが切れた
「くそっ」

もう、レーザー砲は使い物にならない

ミサイルは

すでに使い切っている

右腕が損傷しているため

マシンガンは狙いが定まらない

否、初めからマシンガンで狙いなどさだめていない

ムチャクチャに撃たれる弾が

触手を傷つける

触手はかまわず突っ込んでくる

やはり、決定打にかける

しかし、動きは遅くなっている

真っ直ぐ串刺しにしようと向かってくる触手を

ギリギリまで引きつける

クイックブーストで側面をとり

斬る

触手は蒼い液体を撒き散らして切れた

「「貴様ああああ!!!!」」

本体に向けて

マシンガン撃った

体液を撒き散らしながら

影は抵抗しようと震えている

「「うあわああああ!!!!」」

線を描くようにマシンガンが命中し

スネークに当たった

「「・・・馬鹿な・・・まさか・・・そんな・・・」」

スネークは崩れた天井を見た

「「見たまえレイヴン・・・三日月が・・・綺麗じゃないか・・・」」

生体兵器の動きが止まった

生体兵器の完全敗北だ

全てが終わった

そう思ったとき

突然、地震が起きた

地震はおさまらない

「なんだ!!??」

「「GCが・・・暴走・・・している・・・そのうち・・・この島が・・・爆発する

・・・そして・・・この大陸は・・・汚染される・・・」

「どうやったら止められる!!?」

「「この地下の・・・GCを・・・破壊しろ・・・GCは・・・全ての生体兵器の核だ・・・」」

アレスと戦ったドーム状の部屋の真ん中に
地下へのゲートがあった

地下へ降りると

巨大な部屋が存在した

その部屋の真ん中に

<レッド・カーペット>で見た

緑の玉があった

しかし、その玉は

<レッド・カーペット>のものより
はるかにでかい

振動するGCに近づく

夥しいエネルギーが飛び散っている

「レイヴン!! その先に巨大なエネルギー反応を確認!! 危険です
!!!!」

突然、シフからの通信がはいった

「シフ・・・よく聞け

イー・アール・イー・エヌ・エー」

「?」

「おれの講座開番号だ
そこに、今まで分の給料が入ってる」

「レイヴン?・・・レイヴン!!!!?」

<レッド・カーペット>でGCを破壊した時

強力なエネルギー波がでた

恐らく、このGCを破壊すれば
その比にならないエネルギーが出るだろう

右腕が耐え切れず
吹き飛んだ

「じゃあな・・・」

ブレードが展開し

GCに突撃した

そして、斬る！！！！！！

目の前には

白い世界が広がっている

緑の結晶体が

隣を通り過ぎていく

目の前に

手が差し伸べられた

その手の主は、こちらに微笑んでいる
その女性の手をとった

身体が軽くなる

しかし、ソレと同時に
一つの疑問が心に浮かんだ

俺達は

何のために

戦ったか？

祖国の民を救うために戦った者

自分の信じる者のために戦った者

この世界の未来のために戦った者

俺達が戦い

守り抜いた世界で

一体誰が・・・

「教えてくれ・・・
この世界を

誰が・・・新たな世界へと導く？」

白い世界はやがて
漆黒の世界へ
そして

無になっていく・・・

エピローグ

これは、私の目線で記されるものであり
今回の全ての真相です

2国の戦争は
数々の兵士達の犠牲があり
多くの市民の命が奪われました

多くの土地の形は崩され
多くの人の心に、憎しみが芽生えたことでしょう

戦場を飛び交う銃弾は
何千度という高温にもかかわらず、とても冷たいことでしょう

この戦争は
エンジェル・リング・エクスプロージョン
＜天使破壊輪爆発事件＞により
幕を閉じました

しかし、
まだ、この世界には
争いが絶えません

今、こうしている間にも
誰かが傷つき
誰かが死んでいます

私は、その中で
一人の＜レイヴン＞という存在と共に

この戦争を見てきました

彼は、自分の＜存在理由＞を果たすために戦いました

そして

戦場での彼らは、己の護りたいもののために戦い、傷つき、散って
いきました

それは、国

それは、自分

それは、恋人

それは、世界

それは、全て

彼ら一人一人の護るものは

おそらく同じではないと思います

しかし、彼らが命をかけて護りたかったものは
確実にこの世界に存在します

なら、残された私達は

護られた私達はどうすればよいのでしょうか？

一人のレイヴンが

最期にこう云いました

この世界を、誰が新たな世界へと導くのか？

私達は、彼らの犠牲を無駄にしないために
新たな道を選択しなければならぬのかもしれないかもしれません

その道は、決して容易な道でないことは明白です

しかし、人なら

否、人だからこそ

新しい世界を切り開けるのだと

私は思います

この先の新たな未来を

一緒に築いていきませんか？

著者 シフ

別名 クリス・クライン

エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます
感想、よろしくお願いします m (m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1263c/>

ARMORED CORE CRESCENT NIGHT

2010年10月17日22時51分発行